
真・恋姫†無双～雷の貴公子～

李俊刀燐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫十無双～雷の貴公子～

【Zコード】

Z7554P

【作者名】

李俊刀燐

【あらすじ】

俺は少女を助けて死んだ。

気づくと俺は“無”の世界にいた。

一人の女性が立っていた

管理者「貴方は死んではいけない時に死んだのだから世界がちょっと崩れちゃったのよ」

お~お~まさかお決まりのパターンか?

管理者「だから貴方には違う世界に転生してほしいのよ」

キタアアアアアア - - - (・・) お決まりのパターン

管理者「貴方にはこの中の世界から一つ転生させてあげるわ」

管理者「いい? 一回しかいわないわよ」

? ? ? 「ああわかった」

管理者「いくわよ、とある魔術の禁書田録、ゼロの使い魔、RPG
(・・) R L D、バカとテストと召還獣、とらドラ、ナルト、メ
ジャー、真・恋『真・恋姫十無双にしてくれ』・・・即答ね、いい
わ、決まりね」

管理者「後はサービスとして能力をあげるわ」

俺は少し考えた。

? ? ? 「決まった、超電磁砲 御坂美琴の能力をくれ」

管理者「わかつたわ、後貴方の限界を無くしたから鍛えれば無敵に
なるわ」

? ? ? 「後1ついいか?」

管理者「これで最後よ?」

？？？「わかった」

？？？「日本刀をくれ」

管理者「お安い御用よ」

管理者「それじゃあ・・・いつにいってしゃべる」

？？？「ああ、じゃあな」

そして俺は意識を失った。

いつして俺の恋姫十無双が始まった。

プロローグ（前書き）

「んにちは、心機一転した李俊刀燐です
よろしくお願いします。

プロローグ

「んんん〜〜」

「「「」はどこだ??」

俺は辺りをキヨロキヨロ見渡した。

そこは何もないただ“無の世界”だった。

???.「・・・あははそつだ俺死んだんだっけ」

俺は苦笑してしまった。

??.??.「まさか本当にこんな世界があつたんだな・・・」

俺は天国や地獄を信じないなぜかつて?そりや科学で解明されてるから

だ。俺達人間は脳で考えたりしている脳が死んだらそこでお終いだ、
脳の
意識がそこから天国や地獄に行くと思うか俺はそんなことおもわね
えな。

これ同様神も信じねえ、民族戦争はともかく宗教戦争なんで俺にと
つてはバカげてる、在りもしない神なんて信じて戦争つてマジあり
えない、神がいるつて言つ奴がいるなら俺に見せに来いって思つ無
理だと思うがな。

??.??.「それよりあの子は大丈夫だろうか?」

そつ俺はある少女を助ける為に死んだんだ。

（回想開始）

ピロロロ――

駅員「一一番線、普通列車東京行き、〇〇時に到着します」

？？？「やつと来たか待ちくたびれたぜ」

俺はあの日東京へ行く為に電車に乗るつとしたんだ。

子供がホームで走り回っていた

あやあやあ・・・

あんなとこで遊びやがつて親は何してるんだ？

俺はそつ思いながら電車を待つた。

駅員「まもなく、普通列車東京行き、一一番線に到着します」

電車がはつきり見てきた

あやあやあ・・・つるードーン

男性「たつ大変だ女の子が落ちたぞ！」

？？？「ちつ間に合ひつか？」

電車はもう田の前だった。

俺は線路の飛び込んで少女を救出した、俺も上がろうとしたが間に合わなかつた。

キイイイイイー——グシャツ

そして電車に轢かれて死んだんだ

（回想終了）

？？？「多分大丈夫だろうな」

「・・・」

「・・・」

女性「ちょっと人の話を聞きなさいよ！」

女性「何回私を無視したわけ？」

そこには少々お怒り気味の女性が立っていた。

？？？「ん？」

？？？「あんた誰だ？」

管理者「・・・はあ～まあいいわ、私は世界の管理者よ」

？？？「……」

なんだこれ・・・まさかお決まりのあのパターンか？

管理者「貴方わね、死んではいけないとここで死んだのそのおかげでちょつと世界が崩れちゃったのよ。」

管理者「だから貴方のは違う世界に転生してほしいの」

・・・キタアアア――（・・・）お決まりのパターン。

管理者「貴方には」の中の世界から一つ転生させてあげるわ

管理者「いい？」回しかいわないわよ

？？？「ああわかった」

管理者「いくわよ、とある魔術の禁書目録、ゼロの使い魔、RPG（・・・）RLD、バカとテストと召還獣、とらドラ、ナルト、メジャー、真・恋『真・恋姫十無双』してくれ』・・・即答ね、いいわ、決まりね

管理者「後はサービスとして能力をあげるわ」

俺は少し考えた。

？？？「決まった、超電磁砲 御坂美琴の能力をくれ」

管理者「わかつたわ、後貴方の限界を無くしたから鍛えれば無敵に

なる
わ「

? ? ? 「後一ついか?」

管理者「これで最後よ?」

? ? ? 「わかった」

? ? ? 「日本刀をくれ」

管理者「お安い御用よ」

管理者「それじゃあ・・・こいつはいしゃい」

? ? ? 「ああ、じゃあな・・・こいつは待ってくれ」

管理者「何?」

? ? ? 「あの子はびつなつた?」

管理者「それは・・・秘密よ」

管理者「じゃつ改めてこいつはいしゃい」

? ? ? 「ちよつ待『バイバイ』」「

そして俺は意識を失った。

プロローグ（後書き）

改めて「んにちは、李俊刀燐です。

頑張っていきます、応援よろしくお願いします！

誕生、やの名は公秦

再び田を覚ませるとそこは中華風の天井があつた。

俺・・・やっぱ恋姫+無双に来たんだな

俺「オンギヤア オンギヤア」

自分で笑えてきたオンギヤア オンギヤアって自分で言つている
くせに・・・なぜか笑えてくる

前の世界の赤子の時つてこんなのだつたのかな

医者「旦那様、元気な男の子です」

父「でかしだぞ、春よ」

母「ありがとう、慎」

この2人が俺の新しい親か・・・

慎「後はゆつくり休め」

春「はい」

慎「よし」の子の性は公、名は秦、字は玄龍、そして真名は陸だ

おつ結構いい名じやねえか、ネーミングセンスはあるみたいだな親
父

春「いい名ね

慎「この子の目は輝いてる、きっと将来良い武将になるわ

春「そうかしら私は腕のいい軍師になるとおもつわ

まつ期待にこたえて頑張るか・・・

・・・・

月日は流れ5年後

タツタツタツ・・・

今俺は村の周りを走っている、1ヶ月前からしている為それほど疲れない。

慎「陸よ、今日から5周追加だ！」

陸「まつはこ父上！」

5周か少しきついな何故きついかといふと・・・手に10kg×2足に15kg×2を着けているからだ、5歳児に計50kgって鬼かと思ひうがそれをやつてのける今の自分が怖い。

陸「はあは～

慎「よくやった陸よ、少し休憩したら組み手をしよう

陸「はい父上」

・・・

慎「そろそろいいな」

陸「はい父上」

ちなみに今の主武器は双刀である。

俺は構えた、

陸「行きます！」

慎「来い！」

ガンガン

最初はなるべく親父に隙を見せないよう攻撃していった

慎「もう少しは腕を上げたな」

慎「だがまだまだ私には勝てんぞ」

今だ！一瞬隙を見せた親父を見逃さなかつた。

俺はすかさず背後に回り全力の一撃を放つた。

陸「！？」

慎「今のはすぐかつたぞ当たっていたら負けてたかもしかんな」

俺の放った一撃は親父の剣によつて弾かれた

俺は睡然とした・・・マジかよどりやつて弾いたんだ???

慎「隙だらけだぞ!」

そつ言いながら親父は一撃を放つた

陸「ちつさけられないか・・・

俺は双刀でガードしたが抑え切れなかつた。

グハツ

俺はその場に膝をついた。

慎「はつはつはつ、この公印5歳程度の子供になど負けんわ」

陸「まいつた」

おいおい俺は5歳児だぞそこは笑うなよ親父・・・

春「陸へあなたへご飯よ~」

慎「おおもつこんな時間か

慎「先に行くぞ陸」

陸「はい」

俺は立ち上がり自分の家へ入つていった。

慎「おおー今日は麻婆豆腐かうまそうだな

タツタツタ

陸「遅くなりました」

慎「おお、座れ陸よ

陸「はい」

春「今日は麻婆豆腐よ

陸「やつたー」

ちなみに麻婆豆腐は俺の好物だ。

パクパクモグモグ

陸「母上、おいしいです」

春「ふふふ

春「陸」「飯食べたらお勉強よ」

陸「わかつてぃます母上」

いまさらだが日課を教えよ。朝は大体8時くらいに起きる。その後朝食を取り、9時から勉強を始める。1時頃毎食を食べ、2時頃から鍛錬が始まる。19時頃晩飯を食べ、20時から再び勉強が始まり、23時に就寝するの繰り返しだ。

書室

春「今日は孫子をお勉強しましょ。」

陸「はい母上」

・・・・・

こんなことの繰り返しで早7年がたった。

公泰12歳

ダツダツダツ

陸「親父終わつたぞ~」

ちなみに今は計150kgの錘をつけている

慎「おお、旦元速くなるな

慎「よしじやあ、組み手をしよう」

陸「ア解

俺は構えた

慎「じゃあ私から行かせてもらつぞ」

陸「来い親父」

親父は飛び込んできた。

俺はすかさず左に避け、斬撃を放つ。

親父もその攻撃を予測している為軽がると受け止める。

俺は斬撃止める事なく放つ親父は俺の斬撃避けたり、受け止めた
りしている。

ガンッキンッガキン・・・

ある程度攻撃してやつと隙を見つけた。

そして親父が隙を見せた瞬間。

俺は技を放つ。

陸「烈火斬」

俺は2つの刀を交互に突くそして耐え切れなくなつたと判断したら
片方の刀を刃の無い方へ持ち替えおもいつきり武器を叩いた

ガンガンガンガーン シュルルル～グサツ

俺は親父の剣を叩いた後親父の喉元に刀を突いた

慎「まつまいつた」

親父は降参した

陸「ふつこれで20連勝」

慎「12歳で私を超すとはさすが私と春の子だ」

陸「親父が弱いだけだ」

それを聞いて親父は悔しがった。

その後俺は自主鍊で山に入った。

陸「よしそろそろいいだろ」

俺はポケットからコインを出し指で真上に弾いたそして降りてきた
コインを真正面に弾いた。

ビリーリ

キーン

ビシュー――――――

超電磁砲が放たれた。
レールガン

陸「よし、調子がいいな」

陸「次はこれだ」

雷の力で砂鉄をかき集め剣状にした。

陸「鉄裂剣、黒鋼」

俺は鉄裂剣で木を切つたまるでチエーンソーで切つたような感覚がした。

陸「ん？ もうこんな時間か・・・帰るか」

家に帰ると少々お怒り氣味の母さんが立っていた。

春「陸いま何時だとおもっているのー。母さんお前をそんな子に育てた覚えはありません！」

陸「すっすいません自主鍛錬をしていたら遅くなりました」

おいおいその言い方定番過ぎるw。

春「早く上がりなさい」

陸「はっは」

俺は家へと入つていた

慎「遅いぞ陸」

陸「すまん親父」

食卓には餃子と炒飯が置かれていた。

陸「おう、うまそうだないただきまーす」

パクパクモグモグ

「うまいやつば母さんの料理は漢だ！」

春一そうふふふ

卷之三

陸 なんだ親父?』

慎一 明日従妹が来る

陸へえええ！」

陸
いきなりがよ!

慎 - ああ、しきなりた」

慎 - それと1週間後ここを出る

陸
「
！」

意味が分からなかつた。

陸「なんでだ？」

慎「友人の所に修行に行って来いといつ意味だ」

陸「わかつた、それで師の名は？」

慎「干吉だ」

陸「！？」

おい干吉って悪役じやないのか？

陸「男性ですか？」

慎「いや女性だ」

おこおこマジかよじや ああの悪役干吉は偽物か？

陸「・・・わかりました」

俺は不安に思いながら床についた。

誕生、その名は公泰（後書き）

さて問題

従妹の名はなんだ～？

1公炎

2公和

3公琳

4公泰

どれでしょ～か？

従妹、公和現る！（前書き）

答えは2番 公和でした
わかつた人いるかな？
それでは本文をお楽しみください。

従妹、公和現る！

（陸 s i d o ）

チユンチユン

「んゝ朝か」

「時刻は大体？ 時頃か」

今日は久しぶりに早く起きたそつだ。

「よし暇だし鍛錬でもするか」

俺は村を出て走りこみを始めた

ダツダツダ・・・

「ん？ あそこに人影が・・・」

薄つすらだが剣を持った3人の男が見えた

「あれは賊か？」

「民が襲われてるのか？ チッ仕方がない行くか」

俺は賊のいる方向へ駆けていった。

（陸 s i d o 　out）

（燐 Sido）

「なんて今日は不幸な日なんだろう・・・」

今私は賊に捕まっているなぜかと言つと・・・

（回想開始）

父「燐よ、もう少しで着くぞ」

燐「ふ~やつと着くのね」

私は父の兄に会つべくはるばる遠方から来たのよ

私はドキドキしていたなぜつて？従兄に会えるからよ

私は上気分で向かつていった。

ササツ

2人「！！」

突然賊が現れた。

私は愛刀の火龍偃月刀を持ち構えた

賊1「このガキい武器持つてるぜ」

賊2「嬢ちゃんその武器渡してくれたら今回は見逃してあげるよ」

賊は笑いながら言った。

燐「嫌よ、この刀は公家の家宝貴方達みたいな賊に渡すものですか！」

燐「調子に乗るなよくそガキが！」

賊は剣を振りかざした。

私はそれに反応して賊の剣を叩いた。

燐「やるじやねえか嬢ちゃん、だがこれを見な」

そこには賊に剣を向けられている父がいた。

父「すまん燐」

燐「父上！」

燐「大人しく武器を下ろしな」

燐「くつわかつたわ」

私は刀を離した。

賊1「いい子だ人の話が分かる子は嫌いじゃないよ」

燐「父を放せ！」

賊1「いいだろつただし君がこちらに来たらだ」

燐「わかつたわ」

（回想終了）

賊1「びつしますこの男」

賊2「約束通り放してやれ」

賊1「わかつた」

賊1「ほら、自由だ」

賊1は父を解放した

その瞬間、賊2が父を刺した。

ガハツ

燐「父上！」

燐「貴様よくも父上を！」

賊2「ちゃんと解放してやつたぜ死んだけどな」

賊たちは高笑いをした。

私は憎んだ無力の私を・・・

陸「てめえら、人を殺しておいて何笑つてやがるんだ！」

そこには私と同じ年ぐらいいの男の子が立っていた。

賊1「何だガキつるせえぞ」

陸「てめえらは何故笑つてるか聞いてんだ！」

賊2「ガキは帰つて床の間で寝てろー。」

陸「反省も悔いもないか・・・」

陸「俺の名は公秦、貴様らのよつた賊は俺が斬る！」

賊達は爆笑していた。

賊1「ガキが俺たちを倒すつて何言つて『死ね！』ブシユッギャア
アア」

男の子は賊1の心臓を刺した。

賊3「なつ・・・・」

賊3は驚いて立ちすくんだ。

私はすかさず賊から抜け出した

賊2「殺つちまえ！」

賊3「おつおう！」

陸「鉄裂剣、黒鋼！」

俺は賊3の剣を斬りそのまま首を刎ねた。

賊2「よくも！」

陸「死ね！」

ガンギイギイパキンッスッパ

俺は最後の賊の首を跳ねた。

気持ちが悪かつた、吐きかけた、人を殺すことがここまで気分が悪くなるとは思わなかつた。

陸「鉄裂剣解除」

タツタツタ

俺は少女に駆け寄つた。

陸「大丈夫か？」

燐「あつはい、でも父上が・・・」

陸「俺がもつと速くに着ていれば・・・」

燐「いえ貴方のせいではありません、私が無力だったから悪いんで
す」

俺達はその後埋葬を行なった。

陸「俺の村に行こう」

燐「はい」

（村）

7時頃でも人は結構いた、俺は人目を避けながら進んだ。

村人達は俺の服に着いている返り血を見ていた。

（公家）

陸「ただいま」

春「おかえ・・・あなた！・・・来て」

慎「どうした？！・・・陸ちょっと来なさい！」

陸「はい」

俺は事情を話した

慎「・・・そうだったのか」

慎「人を殺した感覺はどうだった?」

陸「最悪でした、気分も悪くなり、吐きかけました」

慎「それを覚えておけ、それが人を斬るということだ」

陸「はい!」

慎「それはともかくお前達の出会いは最悪だったな・・・」

陸「どういう事ですか?」

慎「お前の隣の子はお前の従妹だ」

2人「えええええ!..」

慎「その火龍偃月刀は公家の家宝、私の弟の物だ」

2人は沈黙してしまった・・・

慎「陸自己紹介をしろ」

陸「はい」

陸「性は公、名は泰、字は玄龍、真名は陸よりしく
へじりゆく」

燐「私は性は公、名は和、字は子頃、真名は燐です、よろしくお願
いします義兄さん」

陸「ああ、燐」

慎「・・・よし決めた陸その子と一緒に連れて行け」

慎「・・・はい」

俺は結局断ることも出来ず燐と一緒に子供の所に行くことになった。

俺は1週間の間燐を鍛えた、結構着いてこれたので「やがて」とか「どんどん
上がつて」とか

そしてあつと/or間に1週間が経つた。

そして別れの日

陸「親父、母さん行つてくれる」

燐「伯父様、伯母様行つてきます」

慎「がんばつて来いよ~」

春「身体には気を付けてね~」

俺達は故郷を出て師匠の元へ旅たつたのであつた。

従妹、公和現る！（後書き）

第2問 次作に登場する、初の恋姫キャラは誰でしょうか？

- 1 桃香、愛紗、鈴々
- 2 華琳、春蘭、秋蘭
- 3 雪蓮、冥琳
- 4 恋

どれでしょつか？

・・・俺に才能があればもっとこれも面白くなるのこなあ・・・は
あ)

遭遇、江東の小霸王（前書き）

正解は・・・3番、雪蓮　冥琳でした
わかつたかな？
じや本文開始です。

遭遇、江東の小霸王

旅立つて10日ほど経っていた、地図では後5日ほど歩けば着くらしかった。

今俺達は森の中をさまよっていた。

陸「本当にこの道であつてるのか?」

燐「わかんない」

陸「はあ～仕方がないこのまま行くか」

燐「うん」

少し歩いていくと突然森を抜けた。

陸「ははは、マジかよちゃんと抜けやがった」

燐「・・・よかつた」

そこには草原だった。

一面真緑の風景だった。

「・・・」

「・・・」

燐「あれ見てー！」

陸「ん？」

俺は燐の向いている方向に顔を向けた。

陸「あれは・・・孫家牙門旗！」

草原には孫家の牙門旗が掲げられていた。

陸「賊退治か？」

俺達は興味を持ち戦場に近づいた。

（孫策 s·i·d·o）

雪蓮「やつとこの口が来た」

私の胸はドキドキしていた。

今日はお母様無しの初めての戦、私は胸が高まっていた。

雪蓮「よし私に続けーー！」

私は敵陣に飛び込もうとした。

冥琳「雪蓮何考えてるの、貴女は大将でしょーーーー！」

何時も通りに冥琳に叱られてしまった。

雪蓮「ぶうぶうだつて今日は私の初陣なんだよ」

冥琳「それとこれは話が別です！」

私は仕方がなく下りた。

雪蓮「わかつたわ、で策は？」

冥琳「あちらは1万、こちらは3万ですから左右の森に弓兵の伏兵を置きましょう、中央は少し前に出て右翼、左翼は中央を援護ある程度経つたら後退伏せていた弓部隊が後方から攻撃、その後混乱した敵を騎兵部隊が殲滅単純ですが賊相手なら問題ないでしょ」

雪蓮「わかつたわ、その策で行きましょう」

私は部隊長を呼んだ。

雪蓮「弓部隊は左右の森に入り待機、左翼、右翼は中央の援護、中央は銅鑼が鳴つたら後退、伏せていた弓部隊が後方から攻撃、混乱した敵を騎馬部隊が殲滅以上よ」

部隊長「御意！」

雪蓮「聞け！…吳の兵士達よ…吳の民を苦しめる賊どもを我々の力で根絶やしにせよ…！」

吳の兵『オー！…』

雪蓮「全軍、出陣ーー！」

吳の兵『オーーーー』

孫策sidooout

陸「やはり、賊退治か」

燐「うん」

俺達は木陰から戦を見ていた。

陸「数は吳が3万、賊が1万ぐらいだな」

燐「どちらが勝つと思ひ？」

陸「断然、吳だろ？？」

と俺たちが話していると

陸「ん？」

サツサツ

吳の本陣近くの草が音を立てていた。

陸「まつまづい、伏兵だ！」

陸「燐荷物持つてくれ」

燐「わかつた」

俺は後の本陣近くまで駆け寄った。

陸「チツ間に合わねえ」

陸『鉄裂剣、狂弓』

俺は鉄裂剣を弓状にして刀を矢にして放った。

陸「間に合えええええ」

ビシュウウーニングサツ「ギャアアアア」

2本撃つたが1本しか当たらなかつた。

陸「あと一人」

陸「しゃあねえ、超電磁砲だ」

ビギュ――――――――

「ギャアアアアアア」

一人は刀が胸に刺さり一人は丸焦げになつた。

陸「ふう・・・間に合つたか」

燐「義兄さん、大丈夫ですか?」

陸「大丈夫だ、それより危なかつたな」

丸焦げになつた男は弓を持っていた。

陸「弓も鍛えなきやな」

すると呉の本陣から兵を連れて黒髪で眼鏡をしている18歳ぐらいの女と桃色の髪と赤いチャイナドレスを着た18歳ぐらいの女が近寄ってきた。

（孫策 si do ）

伝令「敵の前線が崩れました！」

雪蓮「よし今が好機全軍進め！！」

呉の兵「オー！！！」

雪蓮「これでこの戦も終わりね」

冥琳「ああ」

その瞬間

ビギュー――――――

ものすごい爆音がした。兵達は混乱した。

冥琳「何があつた説明せみ」

兵隊長「申し上げます後方に不審な人物有りあの爆音はその者が起
こしたと思われます」

雪蓮「・・・冥琳様子を見に行くわよ～」

〔冥琳「雪蓮！～～」

雪蓮「大丈夫よ兵を連れて行くから」

冥琳「・・・」

私は冥琳の手を持つてその場所に向かった。

雪蓮「誰があんな音を出したのかしら～ 楽しみね」

冥琳「・・・まったく雪蓮は」

私が向かつた先には12歳程度の少年と同い年ぐらいの少女が立つ
ていた。

〔孫策sūdō　out〕

〔冥琳「そこの者止まれ！」

俺達は呼び止められた。

(おひあれば少し若いけど雪蓮と冥琳か・・・)

俺達はそれに従いその場を動かなかつた。

冥琳「お前達は何者だ！」

陸「俺達はただの旅の者です」

燐は怒鳴られたことに少々お怒り気味になっていた。

燐「失礼じゃですか！貴女方を助けたのは義兄さんなのに・・・」

「

陸「燐やめろ」

俺は燐を止めた。

雪蓮「それはどういふ事？」

燐「貴女方を狙っていた伏兵を義兄さんが倒したんですね」

雪蓮「それは本当？」

燐「死体を見ればわかります」

そこには丸焦げになつた死体と刀が刺さつた死体があつた。

冥琳「この鎧正しく敵の兵ね」

雪蓮「ごめんなさいね、疑つたりして」

陸「かまいません」

雪蓮「名はなんといつの？」

陸「性は公、名は秦、字は玄龍です」

燐「私は性は公、名は和、字は子頃です」

雪蓮「性は孫、名は策、字は伯符、真名は雪蓮よ」

冥琳「雪蓮！－！」

雪蓮「命の恩人なんだから真名を渡すのは当然でしょ？」

冥琳「・・・しかし」

雪蓮「貴女も教えなさい」

冥琳「御意」

冥琳「性は周、名は瑜、字は公瑾、真名は冥琳だ」

陸「俺の真名は陸です」

燐「私は燐です」

雪蓮「とにかくさつきの爆音はあなたが出したの？」

陸「・・・はい」

雪蓮「よかつたら見せてくれる？」

陸「わかりました・・・ですが秘密にしてくださいね

雪蓮「わかつたわ」

そして俺は袋からコインを出し指で真上に弾きその弾いたコインを今度は真正面に向かつて弾いた。

ビリビリ

キーン

ビギュ――――ン

その光が通過した辺りは地面がむき出しになつていた。

3人「・・・」

雪蓮「貴方何者?」

陸「俺は特殊な能力を持つてるんです」

雪蓮「特殊な能力?」

陸「具体的には“雷”的能力です」

3人「雷??？」

陸「こんな感じです」

俺は手から電撃を放つた。

ビコビコ

3人「・・・すゞ」

雪蓮「確かに雷ね」

雪蓮「さつさの技は何て言ひの?」

陸「超電磁砲です」

雪蓮「れーるがん?」

陸「手に雷を溜めてコインに向かって放つその雷の力でコインが光のよつた速さで放たれる仕組みはこんな感じです」

3人「? ? ?」

まあ理解できないのは当たり前だらう。

雪蓮「理解は余り出来なかつたけど“すゞ”ってことはわかつたわ」

雪蓮「とこりで貴方達私の所に来ない?」

陸「・・・すいませんこれから師の所に行くので・・・」

雪蓮「わかつたわ、気が向いたら何時でも来てかまわないわ

陸「ありがとうございます」

「うして俺が最初に会った恋姫キャラは雪蓮、冥琳だった。

俺達はその後傭軍から離れ師の下へ向かつたのであった。

遭遇、江東の小霸王（後書き）

第3問、于吉先生の真名はなんでしょうか？

1 火織

2 美琴

3 小萌

4 美鈴

・・・ヒントはお母さんキャラ
さてもうお分かりですかね。
でわ次回をお楽しみに

到着、俺の師は美人でした（前書き）

・・・まさかの100000アクセス突破、応援ありがとうございます。
す、駄作ですががんばっていきます。

正解は・・・4番美鈴でした。
一言言います

禁書日録系の名前を真名にしてあるのもあるのでそのキャラの好きな人下さいません。

到着、俺の師は美人でした

あれから1週間後やつと田的に着いた（結局5日では着かなかつた）

陸「『頃清塾』、やつと着いたか」

燐「やつと着きましたね」

俺達は今『頃清塾』の前に立っている。親父に聞いた所千吉は女性だと聞いたが本当にそうだろうか？

コンコン

2人「すいませ〜ん」

男性「誰だ？」

男の声がして俺は少し警戒した。

2人「公印の息子（娘）です」

男性「中に入つていいぞ」

男は扉を開けた。

2人「お邪魔しまーす」

中は結構広かつた、他にも数名弟子がいた。

陸「貴方が于吉先生ですか?」

男性「いや俺は先生の一番弟子だ」

俺は少しほつとした。

男性「皆来てくれ」

弟子『はい(おひ)』

男性「皆、この子たちに紹介してくれ」

女子「はいじゃあ私から性は太史、名は慈、字は子義よ、よろしくね」

男子「俺は性は嘉、名は威、字は鋼典だ、よろしくたのむ」

女子「わつ私は性は延、名は礼、字は意薰ですよつよつお願いしますです」

男性「で俺が性は季、名は駿、字は刀淋だ、よろしく、ちなみに俺は14歳だ」

陸「俺は性は公、名は和、字は玄龍だ、よろしく」

燐「私は性は公、名は和、字は子頃です、よろしく」

李駿「これからは同じ屋根の下で学ぶ者だ、仲良くなれ」

俺達はうなずいた。

李駿「ところで君達は武、文どちらを学びに来たんだ?」

陸「俺は両方だ」

燐「私は武を学びに来ました」

李駿「よし、じゃあ皆で歓迎試合をしよう!」

弟子『はい(おひ)』

俺達は部屋を出て広場に向かった。

→広場

広場にみんなが集まり自分の武器を教えあつた。

李駿「俺の武器は双斧だ」

太史慈「私は碇槍よ」

嘉威「俺は刀もしくは短刀だ」

延礼「わっ私は!」です

陸「俺は双刀だ」

燐「私は大薙刀よ」

李駿「じゃあ一回戦田は嘉威と公泰だ」

2人『おう』

俺は『紅』『藍』を構えた、嘉威は刀を構えていた。

李駿「よし始め！！！」

嘉威は始めの合図と同時に素早い動きで突っ込んできた、俺は2つの刀でからうじて防ぐことが出来た。

ガンガンカンカン

陸「速いしかも正確に狙つてくるとわ」

嘉威「速さと命中力だけは誰にも負けられん」

俺はなんとか攻勢に出ようと思ったが嘉威の斬撃に身をとられて中々出れなかつた。

防勢のまま10分程度たつた、だが俺達はまだ決着が付かなかつた。

嘉威「はあはあ」

嘉威「粘るな」

ここで俺はきずいた嘉威の息が乱れていることを

そして一か八かの勝負に出た俺は嘉威の斬撃を何とかよけた瞬間

陸「烈火斬」

俺は嘉威ではなく嘉威の武器を狙つて繰り出した。

ガツガツガガガガキーン シュルルル～～グサツ

嘉威「まいった」

陸「かつ勝つた」

タツタツタ

嘉威は近づいてきた。

嘉威「公秦、お前強いな俺の負けだ」

陸「いやいや、お前こそ強かつた」

嘉威「俺の真名は燎だ、よろしくな」

陸「俺は陸だ、よろしく頼む」

俺達は握手し真名を交換した。

李駿「第1試合勝者公秦！」

太史慈「すうじまさか嘉威を破るなんて・・・」

延礼「すつすじ」ですう

李駿「第2試合、延礼対公和」

燐「よろしく」

延礼「よろしくです」

私は構えた、延礼も少し離れたところに構えている。

李駿「第2試合始め!」

始めの合図の途端矢の雨が降ってきた私は火龍偃月刀を回して矢を防いだ、防いでる間にも次々と矢は私を狙って飛んでくる、私は防ぎながら一歩ずつ延礼に向かっていった。

すると延礼は技を出してきた

延礼「爽燕陣です」

再び矢の雨が降ってきたしかも前より重い私は気づかなかつたその雨が凶だということを私は雨を防ぐのに精一杯だつた。

延礼「決めるです」

延礼が言つた途端私は吹き飛ばされた。

延礼「勝つたで『まだよ』・・・すごいです」

私は何とか立ち上がつた、多分義兄さんの特訓がなかつたら終わっていた、でも特訓のお陰で何とか立ち上がることが出来た。

私は見逃さなかつた延礼が驚いている隙に私は延礼の喉元に火龍偃月刀を突きつけた。

延礼「まいつたです」

燐「やつやつたあ、勝つた」

私は嬉しくなり飛び跳ねた。

延礼「公和は強いです」

燐「貴女こそ」

延礼「真名は乱ですか」

燐「私は燐よ」

私達は真名を交換し握手した。

李駿「第2試合勝者公和！」

陸「よくやつたな」

俺は燐の頭を撫でてやつた。

燐「ありがとう／＼」

燐は少し頬を染めていた。

李駿「第3試合公秦対太史慈」

太史慈「よくし私の番だ」

陸「ようじく」

太史慈は碇槍を構えた、俺もすかさず『紅』『藍』を構えた。

李駿「第3試合始め！」

太史慈は何振りかまわらず突っ込んできた、例えるなら猪以上に、まつそんな突っ込みだから避けるのは容易かつた。

陸「おわつ」

太史慈「どうしたの？怖氣ついちゃったわけ？」

陸「いや突っ込むのは燎のほうが上手い」

俺は少し貶した言葉を言つと面白によつて引つかかってきた。

太史慈「なんですか！私のほうが上手いわ！」

おいおいそんなんで怒るとは華雄以上だな、はあ～

陸「だつたら俺に傷を付けてみろ」

太史慈「言つてくれるじゃない、ならやつてやるわ！」

碇槍を無我夢中に振つてきた、避けたり受け止めたりしたが、一撃

一撃する」重かつた。

(「Jの強さなら後数年すれば関羽と同格になりそうだが・・・はまあまずはこの超猪癪を何とかしないとな)

陸「実際に惜しい実際に惜しいこの猪癪がなかつたらもつと強くなれそう何に実際に惜しい」

太史慈「誰が猪ですつてええ」

太史慈はどんどん掛かってきた。

陸「お前以外に誰がいる?」

ブチツ

何かが切れたようだ大体予想が付くが・・・

太史慈「いいわ、アンタに私の本氣を見せてあげる!」

太史慈「甲炎爆風! ! !」

すると太史慈は槍を回し始めたその摩擦熱で火が点き槍が燃えていた、そして俺に向かって一振りした瞬間、爆風が俺を襲ってきた、俺はかるうじて避けたがダメージはすごかつた。

陸「やつぱり惜しい、その力があれば有力な武将になれるのに・・・

陸「そろそろ決めさせてもうう

」

太史慈「やれるものならやつて見なさい」

フツ シュツ

太史慈「！！」

太史慈は反応したが遅かった。

陸「遅い！」

ガンツ シュルルル～～～グサツ

俺は碇槍を弾き太史慈の喉元に刀を突きつけた

太史慈「私が負けるなんて・・・」

太史慈「私の真名は美琴よ、受け取りなさい」

おいおい美琴ってあの美琴さんかよ確かに口調は似ているしルックスや髪型も似てるが美琴はちょっとまずいだろ・・・

陸「俺は陸だ、よろしくな」

美琴「べつ別にアンタを認めたわけじゃないんだから／＼／＼

おいおい勘弁してくれ、あっちの美琴さんに被つちまつ。

李駿「第3試合勝者公秦！」

すると1人の女性が立っていた。

? ? ? 「あら? 貴方達何してるので?

? ? ? 「今日は文学じゃなかつたかしら?」

李駿「先生、新しい弟子が来たので歓迎試合をしてました

? ? ? 「あらそつなの? 新しい弟子は?」

李駿「この2人です」

そう言い李駿は俺たちを指した。

? ? ? 「私の名は千吉、お一人さんよろしく」――口芝

おこおい、」いつもかよ、美鈴さんにそつくりだ

陸「美す・・・千吉先生よろしくお願いします」――口芝

千吉「あら? なんだ私の真名を知ってるの?..」

陸「え?」

おこおいマジかよ・・・

千吉「そつ私の真名は美鈴よ、よろしくね」パチイッ

美・・・いや千吉先生はウインクをした。

俺は少しへきをした。少しへきしてしまった。

陸「俺は公秦 玄龍、真名は陸ですか」

燐「私は公和 子項、真名は燐ですかよろしくお願ひします」

美鈴「公母さんは元気?」

陸「はつは」

美鈴「ならいいわ」

俺達は頃清塾に帰っていた。

いつて俺達の歓迎試合は終わったのであつた。

到着、俺の師は美人でした（後書き）

第4問次回作は遠足に行きますので行く場所はどこでしょうか。

- 1 李家
- 2 延家
- 3 公家
- 4 太史家

さてど～こだ？

里帰りに行くので2日まで更新しません・・・それでは来年会いま
しょう。ようなら～

オリキャラ紹介（前書き）

新年明けましておめでとうございます。
駄作ですががんばっていきます、応援よろしくお願ひします

* 4問目の答えは次回発表します。

オリキャラ紹介

公秦 玄龍（陸）二つ名、？陵の雷、雷の貴公子

主人公、慎、春の息子現在17歳、性別男、現実世界の転生者、武を学ぶ為家を出る（強制的に）、口では愚痴つたり嫌だとか言つて、いる割に悪を見るとその悪を排除しようとする。武器は双刀『紅』『藍』、日本刀『月光』大弓『水鏡華』燐の従兄である。帰郷した際、賊に襲われた故郷を見て、自らが漢統一することを決意する。義勇軍『雷神』頭首兼工作部隊総隊長、恋愛は自分から積極的だが、相手からだと鈍感。髪型は一方通行と同じ、髪色は黒、瞳も黒、身長は大体180cm、体重は67kg

得意なこと、好物

鍛錬、麻婆豆腐

嫌いなこと

偽善者、ガールズラブ（魏）

能力、御坂美琴の電撃使い（エレクトロマスター）の能力を持つ

必殺技、

レールガン
超電磁砲

見たとおり御坂美琴の超電磁砲

鉄裂剣『黒鋼』『狂弓』

磁波で砂鉄を集め剣状にしたものちなみに剣以外の形にも出来る

烈火斬

双刀を交互に突き耐え切れなくなつた武器を弾き飛ばす技

雷刃斬

日本刀に雷を貯め敵を切つた際感電死させる技（制限でき殺さない場合は全身を一時的に麻痺させる）双刀で最初は技を出していたが過去の大虐殺の時封印した。

雷華雷翔陣

複数の矢に雷を貯め放つ技着地地点から半径10m範囲に入る者全てを感電させる、MAXの場合は死ぬ

、

現実世界では董卓軍（特に恋）がお気に入りだつた。

そのため董卓に進む

公和子頃（燐）

公秦の従妹、現在16歳、性別女、11歳の時公秦の家に訪ねる途中賊に襲われ父を殺される、無力な自分を悔いでいる、愛刀は大薙刀『火龍偃月刀』公秦に好意があるがけして表には出さない。騎馬戦だと馬超と同格、義勇軍『雷神』將軍兼騎馬部隊総隊長、長髪、例えるなら馬超ヘア、髪色は茶髪、瞳は黒、身長170cmぐらい、体重は・・・女の子なので聞かないでください。

得意なこと

家事全般

嫌いなこと（物）

賊、陸が好意を持つ女、陸が自分以外の人見惚れること

必殺技

翔光百裂斬

見えない速さで百回斬り最後に重い突きを放ち相手を吹き飛ばす技

太史慈 子義（美琴）

項清塾の生徒、現在18歳、性別女、于吉先生の2番弟子、根っからの武人、ツンデレ娘、武は関羽と同格、以前よりは猪は解消されたがまだ時たま癖が出る、武器は碇槍『雨爪』（あまつま）。ルックス、口調、髪型、性格、全てが超電磁砲の御坂美琴にそっくりでも別人、義勇軍『雷神』將軍兼歩兵部隊総隊長、身長170cm、体重・・・『あんた殺すわよ！』・・・以下略

得意なこと・趣味

魚釣り、料理 特に魚料理

嫌いなこと

勉強、于吉の説教

必殺技

甲炎爆風

碇槍を回し摩擦熱で炎をお越し相手に一振りし爆風を浴びせる技。

李駿 刀淋（汪牙） おうが

項清塾の生徒、現在19歳、性別男、于吉先生の一番弟子、文武両断の武人、項清塾の中で一番年上リーダー資質がある、武器は双斧『餓狼』ほどんど餓狼と呼んでいる。義勇軍『雷神』参謀長兼将軍、ルックスは・・・言い例えると一騎当千の楽就みたい。身長190cm、体重107kg

得意なこと

意外にも裁縫、畑仕事

嫌いなこと（物）

悪人、女たらし（一刀）

必殺技

狼刃鋼空斬

重い斬撃を何度も繰り返し相手が怯んだ瞬間飛び上がり最初の斬撃よりも2倍重いクロス斬撃を繰り出す技、反動で周囲の敵も吹き飛ばす。

于吉（美鈴）

項清塾の先生、現在20歳後半、性別女、管理者に同じ名の人がありましたがそれとは別人です、公印の元弟子、スタイルは抜群、武器は鉄刃鞭『黄炎華』、お母さんキヤラ、ルックス、髪型は御坂美鈴さんにつくりだけ性格は大分違う、義勇軍『雷神』軍師兼將軍。身長170cm、体重・・・『ふふふ』見えない圧力・・以下略

得意なこと

誘惑、口説く、学問

嫌いなこと（物）

昆虫、蛇

必殺技

月蝶の舞

嘉威 鋼典（燎） りょう

項清塾の生徒、現在17歳、性別男、于吉の3番弟子、暗殺術や隠密系の技に長けていて、腕は明命以上。武器は刀『黒影』短刀『閻陰』義勇軍『雷神』將軍兼暗殺部隊、隠密部隊総隊長、ルックス・・・

・禁書目録の服部半蔵つぽい身長180cm、体重65kg

得意なこと

隠密行動、暗殺

嫌いなこと（物）

偽善者、悪人

必殺技
影殺し

延礼 意薰（乱）

項清塾の生徒、現在16歳、性別女、于吉の4番弟子、主に文学、武は弓のみだが腕は黄忠、夏侯淵と同格以上、メガネツ娘、公秦の弓の師、武器は大弓『翔光香』義勇軍『雷神』將軍兼弓部隊総隊長、身長は165cm、体重は・・・聞かない方がよさそうだ、髪型は初春風、ちなみに髪飾りはしていない、髪色は黒、瞳の色は黒

得意なこと・趣味

読書

嫌いなこと

弓以外の武術

必殺技

爽燕陣

重い矢の雨降らせ、敵がそれを防いでいる内に貫通性の高い矢を敵めがけて撃つ技

オリキャラ紹介（後書き）

まあこんな感じです、義勇軍編はもう少しオリキャラが増えるとおもいます。

帰郷、壊された平和（前書き）

4問田の答えは3番公家でした。

駄目作者なので一気に5年後です、外伝も書いつつと思ひで許して
ください><；

帰郷、壊された平和

燐「兄さん、あと少しですね」

陸「ああ」

俺達は故郷に向けて馬を走らせていた

美琴「アンタ、まだ着かないの?」

陸「もう少しだ、我慢しろ美琴」

美琴「わかつたわよ、全くもつ・・・」

美鈴「あらり、お一人さん本当に仲がいいわね」

美鈴先生は俺と美琴をからかった。

美琴「なつべつ別に陸とは仲良くないもん・・・」

美琴は少し照れながら言った。

汪牙「やつこえば陸、お前の故郷どうなんだ?」

燎「俺も聞きたい」

陸「ああ、平和だよ、自警団もいるし」

2人「そうか・・・」（そういう意味じゃないんだが・・・）

乱「そう言えば陸さんって彼女とかいるんですか？」

男子2人（おおナイス、乱）

乱以外の女性「！！」

乱以外の女性達は一気に俺に注目した。

陸「えついない、いない」

乱以外の女性達は安心した顔になつた。

陸「ただ告白された」とはあるけどまつあん時は12だし気にして
はいない

乱以外の女性（その女の子なんて強者何だらう）

何故皆で俺の故郷を目指しているかといつと・・・

（回想開始）

あれから早5年俺の腕は呂布以上になつっていた、公和も騎馬戦に關しては馬超と同格だらう。

そななある日のことだ、俺達は美鈴先生に呼ばれて書室に來ていた。

2人「失礼します」

美鈴「おはよー」——「コシ

やばこ・・・やつぱ美しこ・・・

バコッ

陸「痛つ」

俺は思いつきり燐に弁慶の泣き所を蹴られた。

燐「兄さん顔が赤いですよ?」

見えない圧力で語つてきた。

陸「・・・すまん」

この頃俺が女性に照れるとか顔を染めると直ぐ蹴つて来る
んだよな・・・何故だらうか?

美鈴「あらり、お2人さん、今日も仲いいですね」

俺が蹴られてるだけでなぜ?仲がいいになるんだ?

燐「先生!」

美鈴「ふふふ」

先生は話題を変えた。

美鈴「ああ、そうそう明日遠足に行くわ

2人「えつ？？？」

遠足つて幼稚園児かよ・・・

陸「場所は何処ですか？」

美鈴「え」と場所は・・・『ちょっと待て』なに?」

陸「俺の実家じゃないですか！――」

美鈴「せいか～いよく分かつたわね」

そりや自分の実家は覚えているだらう・・・

美鈴「実は他の生徒の実家も行こうと思つたんだけど許可でたの貴方の家だけだつたのよ」

親父、母さんなぜ許可した・・・家には何もないだらう・・・

美鈴「つてことで李駿達にも言つておいてね」

2人「はあ～・・・わかりました」

こづして俺達は俺の故郷へ向かっていたのだった。

（回想終了）

陸「5年ぶりか、親父達元気にしてるだらうか」

燐「楽しみですね、兄さん」

陸「ああ」

そんな時だった。

ザツザツザツシユツ

当然30人ばかりの賊が現れた。

賊「お兄ちゃん達大人しく身に着けている物全てよこしな」

おいおい・・・マジかよ今日これで賊に会うの3回目だぞ・・・

陸「はいはい、今日は見逃してやるから消えろ、じつちは急いでるんだ」

賊達は高笑いをした。

賊「はつはつはつ、お前今の状況分かつて言つてるのか?」

陸「ああ、分かつてるから言つたんだ」

陸「行くぞ皆」

全員『はい(おつ)』

俺は賊を避けて進んだ、すると一人の賊が斬り掛かってきた

賊「無視すんじゃ・・・」

俺は後ろに回りこみ手刀で首を叩いた。

ドズツ

・・・バタツ

陸「邪魔するなと言つただろ」

賊達『！』

賊「てめえよくも！」

陸「忠告したはずだ消えろと」

賊達は頭に血が上り襲い掛かつてきた。

賊頭「くつ殺つちまえ！」

賊達『おづー』

5人が斬りかかつて来たが容易く避け一番近い者に峰打ちした後4人は双刀で武器を弾き飛ばした。

陸「こんな程度か？身ほど知らずが」

俺は賊を貶した。

賊は美琴のようないに面白いほど掛かつてきた。

賊頭「1人に何手こぼすつてやがる、全員で行け！」

賊達『おつねいつ』

わざとまるで違つ返事だった。

まあ、賊程度10人来ようが100来ようが勝つ自信はあつたが・
・

今度は全員で襲つてきたが双刀で軽々と倒していくた。

そして・・・

陸「お前らー」

賊達「ひつ」

捕まつた賊達は絶望した顔になつていていた。

陸「今日は見逃してやる、ただし悪事はもつするなー」

その言葉に賊達は泣きながら返事をした。

賊「あつ ありがてえ、あんたの名は?」

陸「公秦だ 覚えておけ」

賊「公秦の旦那本当にありがてえ」

陸「わかつたら消えな

俺が言うと賊達は一目散に去つていた。

陸「よしそれじゃあ行くか

俺は馬を走らせた

すると汪牙が声をかけてきた

汪牙「なぜ奴らを殺さなかつたんだ?」

俺は少し考えた後こいつ答えた

陸「それは・・・親父と母さんに汚れた姿見せられんだろ

汪牙「それもそうだが・・・」

陸「大丈夫だ、次奴らが悪事をしていたら問答無用で殺すから安心しろ」

汪牙「・・・」

・・・2時間後

陸「そろそろだな

段々道が懐かしい道に変わつていた。

俺は風景を見て懐かしんでた・・・そんな時

燐「兄さん、あれを見てー！」

俺は燐が指した方向をすぐさま見た。

俺が見た方向には煙が上がっていた。

陸「・・・あそこは村の辺り！親父、母さんー！」

俺は無我夢中に風のように馬を急がせた。

村に着いて俺に[与]つた故郷は見るも無残だった、殆どの家は焼かれ、そちら中に死体があり焦げ臭いと死臭が混ざっていた。

陸「・・・親父、母さん」

すると1人の女性が近寄ってきた、懐かしい良く母さんを長話をする隣のおばちゃんだった。

おばちゃん「二つ公泰君？何時帰ってきたの？」

陸「今わざわざ着いたばっかだよ」

そんなことより俺は親父と母さんが生きているのかを聞いた。

おばちゃん「申しにいくんだけど・・・」

陸「いいから言つてくれー！」

俺は怒鳴つたもう村人が全員氣づくほどい・・・

おばちゃん「公印さんは死んだよ・・・」

陸「えつ・・・親父が・・・何で何で死んだんだよー。」

俺はおばちゃんに聞かされた。

3月前から北の廃村を根城に賊が現れたこと

親父率いる自警団が何度も賊から村を守ったこと

昨日夜襲があつたこと

最初は自警団が勝つていたが子供を人質に捕られ解放の条件に親父
が殺されたこと

その事により形勢が逆転したこと

俺は全てを聞かされた。

そしてよつやく燐達がやって來た。

村の状況を見て燐達は啞然としていた。

汪牙「ひでええ

燎「・・・許せねえ

乱「・・・酷すぎです

美鈴「…………もつ少し早く着ていれば……」

美琴「何なのよこれ……」

燐「…………伯父さんと伯母さんね。」

・・・

陸「さうだ母さんは？」

おばちゃん「生きているけど今夜が最後でお医者様が…………

そして等々……

・・・ブチッ

俺の頭の中の何かが切れた

陸「おばちゃん、奴らの根城、北の廃村つて言つたね」

おばちゃん「ああそうしたよ……あなたまさか……」

陸「そのまさかだよ、燐! お前の馬鹿せー。」

俺は怒鳴った、村人全員が注目したが気にしなかった。

燐「嫌……私も行く」

陸「……わかった

汪牙「俺も行かせてもらひうぜ……拒否選択は無しだ」

燎「……同じく

乱「私も行きます！」

美琴「絶対に許さない！」

俺達6人は決意した

美鈴「待ち『留守お願いします、美鈴先生』……待つて」

美鈴先生は俺達を止めようとしたが俺は耳に入つてなかつた。

俺達は急いで馬を走らせた、目的地、北の廃村に向けて……

帰郷、壊された平和（後書き）

5問目次回に出てくる賊の数は何人だ

- | | |
|---|-------|
| 1 | 1000 |
| 2 | 3000 |
| 3 | 5000 |
| 4 | 10000 |

さてどれでしょ・・・パクリと思われても仕方ないと私は思
クリと思う作者の方すいません；；

決意、義勇軍結成（前書き）

5問目答えは2番3000人でした。
それでは本編をどうぞ。

決意、義勇軍結成

俺達は無我夢中に馬を走らせていた、目的地北の廃村は後半里程度で着く

陸「親父・・・絶対に仇取つてやるからな」

燐「あんなにいい人だったのに・・・許さない!」

汪牙「これだけは言つておく理性を失うなよ陸」

陸「ああ、わかってる」

汪牙「理性を失った時点でお前は賊と一緒になるからな」

陸「くどい、わかってるそんなこと」

汪牙「ならいいが・・・」

陸「・・・もし理性が無くなつたら俺を斬れ」

汪牙「わかった」

・・・・・

（北の廃村）

陸「燐以外は馬を下りたほうがいいな」

なぜ燐を馬から下さないといふと・・・馬無しだと優秀な兵士程度だか・・・馬に乗せると一変し馬超クラスになるからだ。

それに軍馬は燐の馬だけだしな。

燐以外『わかつた』

俺達は馬を森に隠し村の前まで来た。

門番「何だおめえら?」

陸「ちよつと賊頭に用があつてな」

門番「なんだ頭に用があるだつて?」

陸「ああ、」^{ハシマレ}えてくれ

門番「? ?」

陸「公印の息子・・・いや悪魔が来たとな!」

門番「なつあの白警団長の息子だと!」

陸「ああやうだ・・・」

門番「てつ敵『話は終わりだ、あの世にいきな』・・・ギャアア』

俺はそう言ひ門番に刀を刺した。

その断末魔を聞き3000程度の賊が出てきた。

・・・親父、3000人相手で村を守ったのか、俺・・・親父の事
誇りに思つぜ。

陸「皆行くぞ！」

5人『おう』

賊「・・・誰だてめえ！」

陸「俺の名は公秦、お前らが殺した公印の息子だ！」

陸「今日はサービスしてお前らにいいものを見せてやるつ」

賊「なんだいい物つてのは？」

陸「これだ」

俺は袋からコインを出し指で真上に弾き今度は真正面に向かってコインを弾いた。

ビコビリ

キーン

ビギュウウー——ン

超電磁砲で俺の真正面にいた100人程度の賊を吹き飛ばした。

賊「・・・なつなんだ今のは」

陸「賊などに教える義理はない！」

陸「皆行くぞ」

5人『はい（おう）』

美琴「甲炎爆風！」

汪牙「狼刃鋼空斬！」（最初重い斬撃を繰り出し相手が怯んだ瞬間飛び上がり最初より2倍重いクロス斬撃を繰り出す技・・・その反動で周囲の敵も吹き飛ばす）

燎「・・・影殺し」

乱「爽燕陣」

燐「翔光百裂斬！」（目に見えない速さで100回斬り、最後に重い突きををだし相手を吹き飛ばす技）

5人の放った技で賊の数は半分になつた。

賊頭「くつ怯むな、相手はたかが6人だ」

奴が頭か・・・その命もうう..

俺は新技『雷刃斬』を繰り出した。

雷刃斬とは・・・刀に雷を宿し、宿った刀で斬り感電死させる技（制限ができる殺さない場合は一定の時間麻痺させる）

賊頭は断末魔の叫びとともに絶命した。

それを見た賊達は一気に顔が青くなつた。

そこで俺は一言言った。

陸「頭は倒した・・・普段は降伏を要求するが・・・今回は殲滅戦だ、全員生きて帰れると思うなよ！」

その言葉に賊は次々と逃げ出した。

俺は構わず斬つた、斬りまくつた。

・・・・・

ふと見ると死体の山が出来ていた。

臭かつた苦しかった痛かつた

俺は仇を取つたはずなのに悲しかつた。

俺は泣きながら言った。

陸「皆・・・仇を取つたのに何故こんなに悲しいんだ・・・」

皆は俺から目を離していた。

陸「汪牙何故理性を失つた俺を殺さなかつた?」

少し沈黙の後汪牙は語つた。

汪牙「泣いていたんだ」

陸「えつ?」

汪牙「お前は泣きながら殺していくんだ、それを俺は見るに耐えなかつた何も出来なかつたんだ」

陸「・・・そうか俺は泣いていたのか・・・」

その後数分間沈黙した。

そして俺は決意した

陸「皆聞いてくれ・・・俺はもう俺みたいな人を増やしたくないだから俺自らが漢を統一し一度と俺のような人を出さない国を作りたい・・・だから皆力を貸してくれ」

俺は頭を下げる

汪牙「当然だ、俺の命お前に預ける」

燎「・・・当たり前だ」

乱「一生貴方に付いていくです」

美琴「・・・わかってるわよそんなこと」

燐「兄さんの未来ため、手伝わせてくださいー。」

燐「ところで何から始めるんですか?」

陸「まずは義勇軍を創る」

汪牙「なぜだ?」

陸「たとえ俺達6人で国が作れたとしても6人だけじゃ国は平和に出来ない・・・だからまず最初は軍を創るんだ」

汪牙「わかった」

その後俺は誓いを言った。

陸「我ら、血が繋がっていないなくても、志は皆同じ、我らの手でこの国を平和な国に替えること、ここに誓つー!」

俺が双刀を天にかざした後仲間達が次々と自分の武器を俺の双刀に重ねた

5人「ここに誓つー!」

陸「ここで義勇軍結成だ!」

5人『はい！（おうー！）』

陸「名はどうしたらいいか・・・」

汪牙「『雷神』だ」

汪牙は即答した。

陸「なぜだ？」

汪牙「お前に相応しいからだ、お前が戦う姿は正に雷神だったからな」

皆も頷いた。

陸「わかつた今から俺達は義勇軍『雷神』だ！」

5人『おー！』

こうして俺達義勇軍『雷神』が始まった。

決意、義勇軍結成（後書き）

6問次回手に入れる日本刀の名は？

1 月光

2 日光

3 光聖

4 光神

さてどれでしょう？

帰れ、母に渡された物（前書き）

6問田の答えは一番月光でした。

本文をどうぞ♪ ^ ^

今日は短いです。

帰宅、母に渡された物

俺達は村に帰るため馬を走らせていた。

汪牙「美鈴先生にごびうごえぱいいか・・・」

陸「大丈夫だ、叱られたら皆で謝るひつ」

美琴「・・・いやだなあーはあーでも仕方がないか・・・」

燎「避けては通れんだろう・・・」

乱「・・・ブルブル」

俺達は昔美鈴先生本気で怒らせた事がある、その時美鈴先生は笑顔で鉄刃鞭で叩いてきたあれは本当に恐ろしかった、特に女子陣はトラウマになっている。

燐「大丈夫、先生はわかつてくれるよ・・・多分」

俺達は怒られないよう願い馬を走らせた。

（村）

俺達は馬を止め、公家へ向かった。

途中、村人達は歓声を上げ迎えてくれた。

老人「無事じやつたか」

子供「お兄ちやん達す"ーー」

女性「これでこの村も平和になるわね」

すみじ隣のおばちゃんがやつてきた。

おばちゃん「あんた達よく帰つてきたねえ、おばさんとでも心配したわ」

陸「ああ、大丈夫賊は俺達で殲滅したよ」

おばちゃん「本当に? さすが公邸さんの息子なんだね」

陸「俺そろそろ母さんの所行きたいから話しあは後でね」

おばちゃん「ああ、」めんね

俺達はおばちゃんと別れて再び公家に向かつた。

公家の前に先生は立つていた、俺達に近寄つてきた。

美鈴「・・・」

パシーンッ

美鈴先生無言は右手を上げおもいつきつ俺の頬を叩いた。

美鈴「貴方達、仇を取つて満足した?・・・賊を倒してスッキリし

た？」

先生は怒りながら語った、俺は自分で感じた事をはつきり言った。

陸「いえ、逆に悲しくなりました・・・」

先生は怒りの表情を

美鈴「仇を取つたって何も変わらないことが分かつたみたいね」

全員『はい』

少し沈黙した後

美鈴「・・・本当に心配したんだから・・・無事で帰つててくれて嬉しい」

美鈴先生は俺達に抱きつき、泣いた。

陸「・・・先生俺決『それはお母さんの前で言になさい』・・・わかりました」

先生は真剣な眼差しで言った。

俺は理解し母さんの所へ行つた。

公家を見ると無残だつた、家は焼かれ、畠を荒らされ、唯一被害が少なかつたのは馬小屋だけだつた。

（公家、馬小屋）

母たこは馬小屋の中に簡単なベットを敷き横たわっていた。

医者「おお、公泰君よく来た、お母さんに顔を見せてあげなれ」

陸「わかりました」

俺が近づくとそれに反応したかのようにならが起きだした。

春「・・・陸

陸「母さん」

春「陸・・・大きく遅くなつたわね」

陸「・・・母さん俺家に居た時よりもっと強くなつたよ」

春「それはよかつたわ」

陸「後・・・親父の仇も取つたよ、だから安心してくれ」

春「貴方・・・あの数の賊を倒したの?」

陸「うん、俺だけじゃなくて、師の弟子と共に戦つて倒した」

春「やひぱつ、お父さんが戦つていた風になつたわね

陸「? ?」

春「貴方が生まれた時、慎さんが言ったのよ、『この子の田は輝いている、将来きっと良い武将になるぞ』って言ったのよ」

・・・ああ、あの時が、懐かしい・・・

春「慎さんも天国で息子の成長を喜んでいると想つわ

陸「うん」

春「貴方・・・これからどうするの?」

俺は先生と母さんに自分のこれからを話した。陸「母さん、先生聞いてくれ」

陸「俺は・・・もう一度と俺のような民を出さない為に俺自らこの漢を統一して昔のような平和な国を創りたいんだ・・・だから先生力を貸してください」

先生は少し沈黙した後笑顔で頷いてくれた。

美鈴「・・・わかつ・・・いえ、わかりました主よ私は主に一生付き添います」

先生はこの時代でいう忠誠の誓いを俺にした。

陸「先生・・・主じやなく今まで通り陸でいいです」

美鈴「なりません、貴方は私の主です、先生ではなく美鈴とお呼びください」

俺は先生・・・いや美鈴の勢いに負け俺は承諾した。

陸「先・・・いや美鈴わかつた」

一方は母さんは泣いていた。

陸「母さん、何で泣いているですか?」

春「嬉しいからよ、息子がこんなに成長して」

そう言いながら母さんは懐から地図のよつたものを出した。

春「じれを貴方にきつと役に立つわ」

そつ言いながら俺に地図を渡した。

陸「・・・じれは何の地図ですか?」

春「それは貴方自身で考えなさい」

春「貴方は行きなさい、私は疲れたから少し寝るわ」

陸「わかりました母さん、俺行つて来るよ」

そつ言い俺達は外へ出た。

地図を開くとビックリ西の森の地図のよつだつた。

俺達は地図に従い西の森を田描したのであつた。

帰宅、母に渡された物（後書き）

7問、地図に示されてない物はなんでしょうか？

- 1 石碑
- 2 池
- 3 遺跡
- 4 洞窟

さて、どれだ？

財宝、没落した古の王家（前書き）

7問目の答えは・・・3番遺跡でした。

この頃更新しなくてすいません^ ^

それでは本文をどうぞ^ ^

財宝、没落した古の王家

～西の森～

俺達は地図に示された通りに進んでいた、この森は昔よく超電磁砲の練習をしていた懐かしい場所だつたため、意外と迷わずスムーズに行けた。

陸「この地図の最初に描かれてたのはあの拳岩か、懐かしい」

燐「そうですね、兄さん

燎「？？」

陸「俺と燐の修行が終わつた後よく帰りに拳岩の隣の木の木の実を採つて帰りながら食べていたんだ」

汪牙「・・・なら迷つ事もなさうだな

陸「ああ、心配ない」

そう言い歩いていくと拳岩に着いた。

拳岩の隣には大きく立派な木が立つていて緑の葉が綺麗生い茂つていた。

陸「この木だこの木、今はまだ夏だから実は付けていないが秋には綺麗な赤い色の実を付けるんだ」

俺は木に手を付けながら言った。

美鈴「本当に綺麗ね、秋が待ちどきしへなるわ

美鈴は微笑みながらこっちを見た。

・・・なんて綺麗なんだろう。

バコッ

ギュウカウ（雑巾絞りの音）

燐・美琴『顔が赤いですよ（わよ）兄さん（陸）』

燐に何時も通りに弁慶の泣き所を蹴られ、美琴に左腕を雑巾絞りされた。

くつ今日は2人かよ・・・たつく不幸だ・・・

陸「痛ててて、そろそろやめろ美琴」

美琴「いやだ、私と燐に謝らない限り」

なんで美鈴を見ただけで謝らないといけないんだ・・・はあ。

俺は仕方がなく謝った

陸「・・・すまん」

そう言つとやつと左手を放した。

乱「そろそろ次の場所に行かないとです」

陸「ああ、そうだな」

俺は再び地図を開いた。

陸「次に示されている場所は・・・池？・・・この森に池なんかあつたか燐？」

燐「え？ 知らないんですか兄さん、この先の一本杉を左に行くと池がありますよ」

・・・そつだつたのか、知らなかつた。

燐「修行の後よく入つてました、池といつよつ温泉ですが

燐以外の女性『！』

美琴「早く、案内して燐！」

美鈴「ふふふ」

乱「・・・入りたいです！」

女性陣を先頭に温泉に向かつたのであった。

燐の言われたとおり、少し先に一本杉があり、それを左に進むと独特な硫黄の臭いがしてきた。

（男性陣 s.i.d.o）

陸「近いな」

汪牙「ああ」

燎「着いたらどうするんだ俺達？」

2人「・・・」

陸「一緒に入るなんで論外だが・・・」

2人（いや・・・お前なら大歓迎だろう・・・）

燎「俺達2人は女性陣が出るまで組み手でもするか」

汪牙「おつおつ」

陸「・・・ちょっと待て、俺はどうすればいいんだ！」

燎「そんなこと自分で考える、鈍感モテ男が」

は？鈍感モテ男？俺の事なのか？？てかなぜ現代語を知っている・・・

結局俺は1人で鍛錬する事になった。

（男性陣 s.i.d.o out）

～女性陣 s.i.d.o～

美琴「んんん～、温泉か～楽しみ」

美琴は鼻歌を歌いながら上機嫌で向かつていて。

美鈴「…、どう誘うかしら？ふふふ」

美鈴は誰かさんをどう温泉に誘つか迷つていて。

乱「…、やつたです、お久しぶりのお風呂です！～！」

乱はハイテーションで歩いていった。

燐「…、あの誘惑女から兄さんを奪い返さなければ…」

燐は兄をどう振り向かせばいいか考えていた。

～女性陣 s.i.d.o　out～

・・・

そして・・・温泉に到着した。

燎と汪牙は組み手をしにいった。

そして俺は取り残された・・・

陸「俺も行つてくるか」

燐「待つてー』一緒に入りましょ、ふふふ』・・・」

燐が何か言おうとした時、美鈴が横から俺を温泉に誘った。

陸「俺は女性陣が出てからでいいよ」

美鈴「だめよ、女性のお誘いを断るつもり?」

・・・だめだ、美鈴や美琴と一緒に入ったら絶対に理性を失う・・・

陸「・・・」

美鈴「それとも私の裸見たくないの?」

・・・やべえ、想像しただけで鼻血出そう。

陸「俺男だから・・・」

少し沈黙の後

美鈴「私魅力ないのかなあ～はあ～」

美鈴は残念そうに顔を下げたと思つたら服を少しづらした。

陸「○ \$ 」

俺は奇声をあげてしまった・・・なぜかつて?そこは言わなくてわかるだろ。

美鈴「あらり、どうしたのそんなに赤くなつて?」

白を切つた様子で美鈴は話しかけてきた。

それを見ていた燐ははつと我に返り・・・

燐「私だつて！」

そう言い真似して服をずらした。

陸「・・・わかつた入るから服を戻してくれ！」

・・・結局、二人と一緒に入ることになった。

なぜ断れなかつたかつて・・・美人の2人にお願いされて断れるか
?しかも誘惑付で、それでも断れる奴は多分ゲイか熟女好きくらい
だろう。

その後、女性陣にまぎれて1人恥ずかしながら温泉に入つたのだった。

・・・

そして・・・2時間後、再出発したのだった。

陸「次に書かれているのは石碑?そんな物あつたか燐?」

燐「私も知らない」

俺達は結局地図頼りで進んでいった。

示された通り進んでいくと

少し開けた場所に出た、そこにはひつそりと石碑が建っていた。

陸「これか・・・」

燎「何か書かれてる・・・古代文字?」

石碑には文字が書かれていたが欠けていて読める状態ではなかつた。

乱「次はどこです?」

陸「ああ、そうだったな」

最後に示されていたのはこの先の洞窟だつた。

陸「この先の洞窟で最後か

燎「それなら早く行こうぜ」

俺達は最後に示された洞窟に急いだ。

・・・

そこにはまだ壁が建つていただけだつた。

燎「チイツ 最後の最後で行き止まりかよ

乱「残念です・・・」

汪牙「場所を間違えたか?」

美琴「なんでないのよー。」

俺は壁に近づき壁を触った。

・・・一ヤツ

陸「帰るのは少し後だ」

そう言い俺は壁を双刀で斬つた。

陸以外全員「！！」

そして燎が語つた。

燎「隠れ身の術か・・・」

そう洞窟は紙で書かれた壁に隠されていたのだった。

込んだ事やるじゃねえか。

俺達は洞窟の中に入っていた。

・・・

そこには財宝が置かれていた、多分袁家の財産にも勝てそうだった。

金、銀、真珠、瑠璃、などの宝が光り輝いていた。

陸「す、」・・・公家つて一体何者なんだ？」

特に女性陣は目が輝いていた。

美琴「きつ綺麗・・・」

美鈴「あら、この指輪美しい」

乱「・・・す、」です。」

燐「・・・」の髪飾りいなー」

ふと横を見ると2つの武器が飾られていた。

一つは大きい『』、もう一つは黒い鞘の日本刀

そして隣の机に2枚の手紙が置かれていた。

俺は一つ手紙を見た、そこに書かれていたのは・・・

・・・

公秦へ

お前がこれを見ている時は重大な決意をした時だろ？

この洞窟にあるもの全てが今からお前の物になる。

その覚悟は出来ていいか？
けして誤った使い方はしてはならんぞ。

そこに置かれているのは日本刀『月光』と大弓『水鏡華』だ。

月光は昔私達の先祖様が救いになつた異国の者が渡したものだ、お前ならうまく使えるだろう。

そしてもう一つは昔公家に仕えていた武将の忘れ形見だ、その者の弓の腕は天下一品と言われている、
これに相応しい者に渡してやれ。

最後にもう一度言つぞ、本当にこれを受け取る覚悟は出来ていいか
？出来てなければ立ち去れ

公印

・
・

親父・・・大丈夫だ覚悟は出来ていい、俺必ず天下を取るから見て
いてくれよ親父。

そして俺はもう一つの手紙を見た

・
・

子孫へ

その宝を見て驚いたであろうしかし安心せよ正真正銘公家の宝じや。

この宝を受け取る前に公家の真実を教えねばならん、覚悟は出来て

いるか？

実わな公家は古に没落した王家のじや・・・驚いたであらうしかし
し真実じや。

公家の始まりはのつ、古の王の弟が権力争いに嫌気が差してな、こ
の地に身を潜めて住んだのじや、王の弟は自らの名を捨て新しく公
陣名乗つたのじや、そういうこれが公家の始まりじや。つまりお主
は王家の血を引く者じや

このじとを踏まえて、王家に恥じない使い方をするのじやぞ！

公家3代目公炎

・
・
・

嘘だろ・・・公家が没落した王家だつたなんて・・・

そして俺は両方とも皆に見せた。

皆の反応はさまざまだつた。

燐「えつー私に王家の血が流れているのー！」

汪牙「まさかな・・・」

美琴「えつー・嘘でしょ・・・」

美鈴「あいら、これなら国を作れるわね」

燎「……改めて主よ私は主の影になります」

乱「……すうすうぎですう」

俺達はこの後一旦村に戻り大型の馬車を借りて宝を積み込んだのであつた。

それにしてもどうやらひつと収まるとは思わなかつた。

財宝、没落した古の王家（後書き）

第8問、義勇軍が滞在している町の名はなんだ？

- 1 ? 陵
- 2 南陽
- 3 巴
- 4 平原

ヒント、まだ恋姫キャラは出ないよ・・・わかつたかな？

葬式、?陵の町（繪書も）

8問田の答へは・・・一番?陵でした

ーーーーーまだ志姫キャラは出ませぬ、お許しひだりや。

滞在、？陵の町

（村）

俺たちが村に戻る時には母さんは死んでいた。

医者によると、俺達が家を出て直ぐに息絶えたという事だ。

俺は悲しかったでも決意を持っていた為泣く事はなかつた。

あれから4日経つていた。

俺達2人は墓地に来ている。

陸「母さん、親父、俺必ず治安の良い平和な国を作るよ、だから天でゆつくりと見ていてくれ」*管理者を見たため、神や天国などを信じるようになった

燐「伯父様、伯母様、安心してください私が兄さんを支えます」

俺達は2人の墓の前で祈つた。

燐「おーい、陸、燐出発の準備が出来たぞ～」

陸「ああ、今行く」

陸「行くぞ、燐」

俺は燐の手を持ち、燐いる方へ向かつた。

燐「はつはい、兄さん／＼／＼

燐は顔を染めながら向かった。

汪牙は村長に財宝の一部を渡していた。

汪牙「出立の前に挨拶できたか?」

陸「ああ、済ませてきた」

汪牙「こっちもお前に言われた通り村長に村の復旧のために財宝の一部を渡したぞ」

陸「そうか」

陸「ところで乱と美鈴は?」

汪牙「先生は手紙を出しに伝書鳩の所に、乱は馬車の中でお前用の矢を作っている」

陸「そうか、先生が戻つたら出立でいいな」

汪牙「ああ、そうだな」

・・・10分後

美鈴「ごめん、お待たせ」

美鈴は急いで走ってきた。

陸「大丈夫ですよ」

陸「それじゃあ、全員揃つたし出立するか」

汪牙「そうだな、美琴、先頭は頼んだぞ」

美琴「分かつてゐるわよ、そんなこと」

陸「燐は右、燎は左を頼む、俺は後ろに付く」

2人『はい（おひ）』

そして俺達は故郷を旅立つた。

おばちやん「何時でもいいから帰つてきなさいよ、貴方の故郷だか
『ひ』

老人「達者でな、道を間違えるでないぞ」

子供「今度帰つてきたら、旅の武勇伝聞かせてよ～」

ほぼ全員の村人達が俺達を見送つていた。

・・・

汪牙「とにかく近いのは益州か荊州だなどちらかに行けばいいんだ?」

陸「ここから近いのは益州か荊州だなどちらかに行けばいいだろ」

燎「俺は荊州だな」

乱「私は益州です」

美琴「荊州でいいんじゃない?」

燐「兄さんの好きな方でいいです」

美鈴「どつちも微妙ね」

・・・

陸「よしじやあ益州に行くか」

6人『了解』

俺達は益州に向けて馬を走らせた。

・・・

そして一週間後

（益州　？陵郡）

俺達は？陵の町に滞在している・・・理由は荊州の賊が益州にも範囲を広げているからであった。

今の所、『雷神』の総戦力は2000人程度、そのため7人で賊の相手をしている。

町の人からは雷の貴公子と2つ名で呼ばれ始めている。

そんなある日の夜・・・

7人で会議が行なわれていた。

賊の本拠地をどう攻略するかを決めていた。

汪牙「賊の総戦力は2万・・・さすがに2007人じゃきつい」

・・・いい事思いついた・・・だがうまくいくだろうか?

陸「1つ案がある・・・だが相手が乗るかは分からぬが」

美琴「案があるなら、とつとと言いなさいよ全く・・・」

陸「相手は確かに半分以上元農民だつたよな?」

汪牙「ああ、そうだ仕切つている奴ら以外は荊州の重税に耐え切れなくなつた農民達だ」

陸「それなら説得すればこちら側に付くんじゃないのか?」

汪牙「確かにありかもしれんが・・・」

陸「上の奴らを斬れば大丈夫だと思つ・・・」

汪牙「そこまで奴らが信用するか?」

燎「わからんな・・・」

美鈴「でもやつて見る価値はあるんじゃない?」

燎「確かにやつて見る価値は有りそうだな」

燐「うまく行けばいいですけど」

陸「一か八かだが、俺は成功する事を信じる」

汪牙「分かったそれでいい」「ひー

陸「出陣は3日後、解散」

解散の一聲で皆は一礼し自分の部屋に戻つていった。

・
・
・

翌日～町外れ～

訓練場が無い為、町の外で訓練を行なつてゐる。

陸「おう、汪牙調子はどうだ?」

汪牙「ああ、そじり辺の賊には負けないくらいにはなつたな

兵長「公秦様だ、皆氣を引き締めろ」

兵『おー』

俺は一度兵達を集めた。

陸「既聞いてくれ、2日後、賊との最終戦を行なつ無論君達にとも戦つてもうひ止し君達は指揮官だけを狙え、けして兵を殺さぬよ」

兵達『はつ』

陸「わかつたら、戻つて自りを鍛えろ」

兵達『了解』

兵達は訓練に戻つていった。

汪牙「歩兵が1000（槍、剣など）や混ざ（馬）が500騎

兵が500つといが

陸「もう少し兵が居てくれればな・・・」

汪牙「そうだな・・・」

俺は少し黙つた後、場所を離れた。

・・・とこの変わって？陵の町内

おひちやん「公秦様、肉まことですか？」

おひちやん「公秦様、おはよつゝれこめす

子供「お兄ちやん、遊んで～」

母「いり、公秦様に失礼でしょ」

一言言うと俺の人気は鰻上がりだ。

ほとんどの町人が俺の名を知っている。

そんなところに・・・

美鈴「主」

陸「美鈴か、どうだつた？」

美鈴「借りられた兵は5000人でした」

陸「あつ思つたより多く借りれたな」

美鈴「はい、これなら主の案うまくいくかもしれません」

陸「それならよかつた、よしご日後絶対に成功させるぞ！」

美鈴「はい！」

よしこれで戦力は7000になつたこれならうまくいきそうだ。

その後俺は近くの森に入り、美琴と組み手をしたのだった。

滞在、？陵の町（後書き）

第9問・・・といきたいですが問題が無いので近々登場する新キャラの情報を教えます^ ^

玲封 海栄（涙）

元黄巾党、公秦の言葉に心を打たれ彼を守ると決意する、速さ、隠密行動、騎馬、実技に関してトップだつたため親衛隊隊長に任命される、武器は西洋から伝わってきた西洋剣レイピア、聖風消波セイレントボーン、騎馬戦は騎士槍レッドハーツ、赤麗心レッドハートを使う、義勇軍『雷神』親衛隊長、身長168cm、体重は・・・やめておこづ、髪型はロングで佐天さん風もちろん髪飾り有り髪色は赤が混ざった茶、瞳の色は赤

得意な事

元々農民のため、農作業、家事、掃除が得意

嫌いな事、者

辛い物と公秦に纏わりつく女 つまり、于吉、太史慈、公和の事

必殺技

連放一突

レイピアで連突して最後の一突で吹き飛ばす技

初陣、黄巾達の苦労（前書き）

・・・まさかの10万アクセス突破w駄文、駄作ですがこれからも頑張りますので応援よろしくお願いしますm(ーー)m

公秦の好きな恋姫キヤラランキング（真あり）！

1位・・・恋！

2位・・・蓮華&霞！

3位・・・月&明命&雪蓮&美以&桃香&愛紗！

4位・・・亞沙&翠&白蓮&張二姉妹！

5位・・・桔梗&紫苑&星！

続いて公秦の好きな勢力！

1位・・董卓軍！

2位・・吳軍！

3位・・蜀&黄巾&南蛮軍！

4位・・公孫贊軍！

5位
・
・
魏軍

初陣、黄巾達の苦労

決戦の日

陸「準備はできたか?」

汪牙「ああ、大体終わつた」

乱「いっしも終わりました」

美琴「何時でも行けるわ」

燐「終わりました」

燎「すでに済んでいる」

美鈴「大丈夫よ」

陸「よし準備が出来たな、全軍出陣!」

兵達『オー!』

俺達義勇軍は賊の本拠地に向けて出陣した。

・・・

（草原）

俺達はなるべく賊にばれないよう天幕を張った。

燎「敵の根城はここから2里離れた所だ左右には森があり伏兵を置くのは有利だろ？」

陸「わかった」

汪牙「作戦を立てる、まず、俺、美琴、先生が賊を挑発し、砦から誘い出す、陸、燎、乱、燐は軍を半分に分けて左右の森に待機、大体の賊が砦から出たら、森に待機していた両軍が敵の背後を突く、おまけに燎部隊が砦を占拠、賊頭を討ち取つたら、陸が説得、まあ、最後はうまくいくとは分からんが作戦は以上だ」

陸「いいな、それで行こう」

6人『了解』

俺は天幕を出て日本刀を鞘から出し天に向かってかざして言った。

陸「皆初陣で緊張をしているのは分かるだが敵は手加減などしない自分の命、家族の命、そして？陵の民の命を守りたければ全力を出しきつて戦え、そして我々の旗を敵の砦に掲げようじゃないか！」

兵達『オー！』

兵達の士気が一気に高まった。

兵「やつてやる俺達が守るんだ！」

兵「そうだ、俺達なら勝てる！」

兵「？陵……いや公泰様のために！」

兵達『勝つ！』

陸「全軍、進軍！」

兵達『オー！』

俺達は進軍していった途中の囮の3人と別れ俺達は森で息を潜めた。

（囮部隊 S i d o ）

・・・

汪牙「そろそろだな」

美琴「ギタンギタンにしてやる！」

美鈴「早く行きましょ、ふふふ」

3人は賊の根城まで来た。

門番「貴様ら何者だ！」

汪牙「俺か？俺らはお前らを倒しに来た義勇軍だ」

門番「はつ？3人で勝てると思つてゐるのか？」

汪牙「馬鹿か、お前？勝てると思うから今いるんだろ？が

門番「なめやがつて3人」とき俺一人で倒してやる」

汪牙「そらかなら掛かつて来い」

門番は槍を突いてきたが汪牙はかるがるとかわしていった。

門番「当たらん、くそ」

汪牙「そろそろ、倒していいか?」

門番「やれるもんな『終わりだ、シユツザン』ギャアアア」

門番の断末魔と同時に矢が放たれたが軽々とかわしていった。。

汪牙「よく聞け賊ども俺達は義勇軍『雷神』の3將軍だ貴様らなど俺達3人で十分だ掛かつて来いザコジもが!」

その言葉に反応して砦の門が開けられた。

指揮官「3人など蹴散らせ!」

黄巾党「オー」

汪牙「1000人程度か、指揮官以外はなるべく殺すなよ」

美琴「わかってるわそんないと」

美鈴「大丈夫よ」

汪牙「行くぞ！」

美琴「甲炎爆風！」

汪牙「狼牙鋼空斬！」

美鈴「月蝶の舞」（まるで踊っているかのように鞭を振るい、それに魅了されている敵を気づかない内に体中切り刻む技、特に敵が男だと効果は倍増する）

手加減したので500人程度しか吹き飛ばせられなかつた。

だが効果は大きかつた、どんどん敵が皆から出てきた。

汪牙「そろそろ後退するぞ！」

美琴「はいはいわかったわよ」

美鈴「あらら、もう少し相手したかったのに・・・」

俺達は賊を全員皆から出す為後退した、それにまんまと引っかかつた賊達は追いかけてきた。

指揮官「敵が後退したぞ、今こそ好機、突撃！」

・・・面白いように引っかかってくる、そろそろだな。

俺は弓を取り鏑矢を放つた。

ヒュ――――――

汪牙「後は頼んだぞ、陸」

（砲部隊 s i d o o u t s）

一方その頃・・・

ヒュ―――

陸「合図だ、全軍突撃！」

兵達『オー！』

左右の森に潜んでいた主力部隊は鏑矢の合図と同時に敵の後方を突いた。

賊頭「なつ伏兵だと！」

陸「指揮官のみを狙え！」

兵達『オー！』

陸「燎隊は皆を占拠せよ」

燎「はつ」

燎隊は皆占拠に向かつた。

賊頭「数は勝つていて押しこめ！」

陸「貴様が頭か・・・その命もいつー。」

俺は指示を出している賊頭の方に向かつた。

賊頭「なつ・・・」

ズシャツ・・・バタツ

陸「貴様らの頭はこの公奏が討ち取つた！」

その言葉を聴いて一気に黄巾党達の士気が下がつた。

指揮官「くつ 一点集中突破で皆にもどれ！」

その声を上げた瞬間、皆に“嘉”の旗が掲げられた。

黄巾党の士氣はどん底に落とされた。

ふと見ると女がいた多分黄巾党の1人だろう・・・

俺は彼女に近づき言った。

陸「お前達に善人に戻る機会を与えてやる」

陸「俺達の軍へ入れ、入れば過去の罪を許し、善人に戻してやる・・・
正しそれを与えるのは元農民だけだ、賊は捕縛する、全員武器を
捨てよ！」

黄巾党達は次々と武器を捨てていった。

（黄巾党 s.i.d.o.）

私は賊頭の近くにいた勿論頭が殺された時もはつきり見ていた。

頭を殺した奴がこちらに近づいてきた、私は殺されると思ったけど実際は違かった。

陸「俺達の軍へ入れ、入れば過去の罪を許し、善人に戻してやる」

その一言は私達にとつては天の救いだった。

確かに私達は故郷を捨て賊どもと一緒にになつたけどそれは荊州の重税がひどかつたせいだもし昔のまんまだつたら私達は故郷で畠仕事をしていた絶対に、今で戻りたいと思うときもあつた。

そう彼の一言は私達を救つたのだ

黄巾党（女）「なんで賊なのに救おうとするの？」

陸「お前達は荊州の重税に耐え切れなくなつた者達だろ、だから元に戻る機会を与えてやるんだ」

その言葉に私達は武器を落とした。

（黄巾党 s.i.d.o. out）

黄巾党達は武器を下ろしていった。

だが賊達はまだ戦いたいようだ。

陸「残るは賊のみ殲滅せよ！」

兵達『オー！』

残つた賊達は捕縛に成功、俺達義勇軍の初勝利に終わった。

そして・・・

陸「戦いは終わつた皆帰るぞ！」

そう言い俺達は新たに加わつた1万8千の兵達と共にと?陵の町に
帰つていた。

初陣、黄巾達の苦労（後書き）

第9問次回で農業班の人がかぶつてる帽子の色はなんだ？

1 青

2 赤

3 紫

4 緑

わかるかな？・・・適当なクイズですいません・・・

訓練、初日の鍛錬（前書き）

9問目の答えは・・・2番の赤でした^ ^

本編をどうぞ^ ^

感想ありがとうございます^ ^ 駄作ですが頑張ります^ ^

訓練、初日の鍛錬

帰還した俺達は？陵の民達に勝利を伝えた。

民達は歓声を上げたり涙を流している人達もいた。

俺は町の中心に行き黄巾党達の事を話した。

陸「この者達は一度は外道に落ちた・・・だがそれはこの時代のせいだ、そのため俺はこの者達にもう一度善人に戻る機会を与えてやり、だから差別をしないで暖かく迎えてやつてくれ頼む」

俺は一礼した・・・

最初は沈黙していたが段々声が上がってきた。

男性「俺は公泰様を信じる」

女性「私だって」

老人「何という心の持ち主じや、わしは感動しましたぞ」

・・・

批判の声は一つも無かつた、俺は正直嬉しかった。

その後俺達は町の外の天幕に戻った。

俺は元黄巾党達を集めて、俺の意思を伝えた。

陸「俺はこの国を昔のように争いの無く復讐も無い平和な国に戻したい、だから俺に力を貸してくれ・・・もしどうしても戦いたくなかつたら言ってくれ俺が？」陵の民に言って農民に戻してやるから」
・・・

沈黙の後元黄巾党達は次々と言に出した。

少女「私は公秦様の盾となります」

男「私も公秦様の力になりたいです」

男2「自分は農民に戻りません！」

女「女の私でも良いなら公秦様に力を貸します」

青年「俺は公秦様に近づける様に頑張ります」

全員が俺達の兵になることを志願した。

陸「わかった・・・だが農作業はしてももう一つ一日ずつ交代で5000ずつ畠仕事をしてもらうそれは2000の兵達も同じだから心配するな。」

新米兵達『分かりました』

陸「後、基本訓練が終わったら適正訓練をする、その事によつて、歩兵（色々）弓兵、騎兵、隠密兵（暗殺兵、工作兵）に分かれてもらう』の事をしつかり焼き付けておく事」

新米兵達』『了解です』

陸「今日は」これで解散、用意してある天幕で寝てくれ

新米兵達』『はつ』

新米兵達が出た後、俺は町の大工を呼んだ。

陸「頼みがある」

大工「わかつてやす、兵舎ですか」

陸「20000人が入る兵舎を作ってくれ、複数で分けても構わん
からなるべく早めにな」

大工「了解しやした」

陸「後、この前頼んだ物できたか?」

大工「明日の朝にはできやす、ですが職人でもないあつしで良いん
ですか?」

陸「木剣、木槍は折れなければ多少変でも構わん、木弓は最後延礼
が見てくれるから大丈夫だ」

大工「・・・わかりやした、総出で1月で終わらせやす」

陸「すまない、親方」

大工「気になさんな、ちゃんと御代は貰いやすから」

陸「はははつ頼んだぞ」

大工「それでは失礼しやす」

大工の親方は帰つていた、・・・あの親方良いな、俺の目に狂いは無かつたな。

そして俺は疲れたので一足早く寝付いた。

翌日・・・時刻9時

新米兵達は200列で並んでいる

陸「皆集まつてゐるな、まず4班に分ける、200列から4列になれ」

新米兵達『了解』

まあ、数も数だから多少時間が掛かった。

陸「色の違う帽子を被つてもらう、左から1列目は赤、2列目は青、3列目は緑、4列目は、白の帽子を被つてもらう、今日は赤が農作業してくれ、それ以外は合同で体力づくりをする」

陸「農作業は李駿、于吉が見て、体力づくりは俺、公和、嘉威、太史慈、延礼が見る」

新米兵達『はつはい!』

人が多い為帽子を渡すのに時間が掛かった。

陸「よし、各自移動」

赤帽の新米兵達は李駿に連れられ畠へ向かった。

「体力づくり班 Side-O

陸「よし、じゃあ手始めに町の周りを一周！」

陸「別に全力疾走しろというわけではない、自分の調子で行つてい
い、但し歩くと罰金だこれを覚えて置けよ」

新米兵達『了解!』

新米兵達は走つていった。

・・・

陸「よし、全員帰つてきたな、次は腕立て2時間の間できるだけ多
くやつてもいい」

陸「着いて来れない奴は最低でも100回はしてもらひ」
陸「着いてこれる奴はどんどん行くぞ!」

新米兵達『了解!』

陸「では・・・始め!」

俺が手を上げた瞬間一斉に腕立てを始めた。

中々、見込みがあるな。

2時間後・・・

兵1「はあはあ

兵2「ふ~」

女性兵1「・・・きつい

・・・

何とか全員100回以上を終えたようだ。

陸「よし、1時間休憩だ、飯食べて来い」

新米兵達『はつはい』

その言葉を聞いて新米兵達のさつきまで疲れていた顔が少し和らいだ。

そして1時間後・・・

陸「・・・次は武器鍛錬だ!」

俺達は大工の親方に頼んで作ってもらった木剣、木槍、木弓を持つてきた。

陸「好きなのを選べ別に今職業が決まるわけではないから自分の不

得意な物でも構わない

そつ言つと一斉に武器を持つて行つた。

陸「ここから3つに分かれる、まず剣兵は俺と嘉威が見る、槍兵は公和と太史慈に見てもらえ、弓兵は延礼が見てもらえ、以上」

言われた通り新米兵達は各自武器の鍛錬をしたのだった。

「体力づくり sid o out」

「農作業 sid o」

李駿「元々農民だったから耕す事は出来るだろ?」

新米兵「できます!」

李駿「なら、始めるか」

数が数のため結構広い畑が出来た。

李駿「おつもう昼か、よしこで1時間休憩だ、飯食べて来い」

新米兵達『はい、いつてきます』

1時間後・・・

李駿「よし、次は種まきだ」

新米兵達『はつはい』

種まきもスムーズに終わった。

李駿「やはり、この数だと速いな」

李駿「おつもうこんな時間か、よし作業止め、最初の場所に戻るぞ」

新米兵達『はつはい』

（農作業 si do out）

（朝の集合場所）

陸「全員集まつたな、今から休日についての事を教える」

陸「4日間の後の次の日が休日だつまり4日間訓練の後1日休日を繰り返すってことだ、休日は？陵の町で食事や買い物をしても良し、身体を休めるため休むも良し、自分を鍛えるため自主練をしても良し、つまり自由だ何しても構わない、但し悪事は別だぞ」

俺は袋を出した。

陸「今から支給金を渡す、その金で休暇を過ごせ」

その言葉言つた後、直ぐに列が出来た。

金を渡すだけなのに結構時間が掛かった、さすが2万の数だ。

陸「そろそろ晩飯だ、解散」

新米兵達は食堂へ急いだ。

まあこんな事が1ヶ月行われていた、もちろん口に口に訓練はきつくなっていたそれでも兵達は着いてこれていた、途中農地が余りにも広くなつたので農業班が激減した、休暇も何事も無く過ごせた事はよかつた。

訓練、初日の鍛錬（後書き）

第10問、次回出てくる玲封が所属になる隊はどれだ？

- 1 歩兵隊
- 2 騎馬隊
- 3 隠密隊
- 4 親衛隊

さてわかるかな？、次の次から黄巾党討伐が始まります^ ^

試験、少女の夢（前書き）

10門目の答えは・・・4番親衛隊でした。

雑談ですが昨日、織田 信奈の野望⁵を買いました・・・ネタバレですが一番印象が良かつたのがやはり良晴と信奈のキスシーンでした・・・自分もみかげ先生の用にいい文を書きたいと思いますが・・・今が限界です・・・でも少しずつ近づいていきたいと頑張ります。・・・それでは本文をどうぞへへ

試験、少女の夢

私の名は玲封、字は海棠、公秦様の下について一ヶ月が経ちました、私は私を救ってくれた公秦様のため死ぬ氣で修行を勵みました、そつ夢を果たすために・・・

試験当日

李駿「次12794番ー」

玲封「はい！」

李駿「まずは速さの試験だ、町を一周し戻つて来い」

玲封「はい！」

李駿「始め！」

合図と同時に風に乗つたのかのよつとすばやく走つた・・・

6分後

私は全力で走つた、正直途中倒れかけたけど夢のため頑張つた。

李駿「6分13秒・・・合格」

ちなみにこれまでの1位は男性6分47秒、女性6分45秒・・・つまり桁違いに彼女が速かつた事だ。

嘉威「次は隠密試験だ、兵に捕まらない様に巻物を取りに行け」

玲封「はい！」

嘉威「始め！」

私は気配を消して進んでいった、途中見破られかけたが何とか巻物を取る事に成功した。

玲封「はあはあ、取つてきました」

私は疲れた顔で巻物を嘉威様に渡した。

嘉威「ほう、5分丁度か中々だな合格」

太史慈「次は実技よ、私と勝負しなさい！」

玲封「えつ？」

なぜ私が太史慈様のお相手を？私は少し戸惑った。

玲封「・・・なぜですか？」

太史慈「前の2人からの推薦よ」

玲封「わっわかりました！」

私はレイピアを構えた・・・さすが太史慈様隙がない・・・

太史慈「それにしても貴女の持っている剣ここらへんじゃ見かけな

いわね」

私は警戒しながら返した

玲封「この剣は遠く西洋からの物と聞いております」

太史慈「へ～そなんだ、じゃあなたの腕見せてもらひうわ」

そう言い太史慈様は突っ込んできた。

そして私はすかさず避ける、私の武器はレイピア、あれ（碇槍）を受け止めるはほぼ不可能なら一撃で決めるしかない！

避けると同時に技を出した。

玲封「連放一突！」

レイピアで連突を繰り返した。

太史慈「速いわね、速さだけなら公秦に並ぶわ、でも速いだけじゃ私を倒せない！」

太史慈「甲炎爆風！」

繰り出される爆風を何とか避けて最後の一突を放った。

がその一突当たらなかつた。私の喉元に槍が突きつけられていたからだ。

太史慈「勝負有りね、中々いい勝負だったわよもつと自分を磨きな

さい！」

玲封「はい！」

太史慈「次は騎馬の試験よ、がんばりなさい」

玲封「はい！」

公和「騎馬での競技は三つ、一つ騎乗しながら弓矢で案山子を撃つ、二つ同じ試験者との対決、三つ私と勝負以上よ、12794番・・・いや玲封貴女の実力見せてもらうわ」

一つ目は軽々とほぼ真ん中に射落とした、まあこれくらいは訓練すれば出来る。

二つ目は13632番（黒苑）と対戦した。

黒苑「俺の名は黒苑、ござ参る！」

玲封「我が名は玲封、掛かってきなさい！」

私は騎士槍ランスを構えた。

相手は普通の槍のようだった。

公和「始め！」

黒苑「女が相手とはついてるな、行かせてもらひ！」

そう言い黒苑は槍を振り回し突っ込んできた。

私はそのまま待ち構えた。

玲封「来なさい！」

黒苑は槍を振りかざした私はランスで弾き返した。

黒苑「女の割りにはやるな！」

玲封「まだまだ！」

ガツカンガンガシュツカツ

激しい交戦の中ふと黒苑が隙を見せた瞬間、私は黒苑の武器を弾き飛ばした。

黒苑「・・・まさか女に負けるとは・・・降参だ」

公和「勝者、玲封！」

玲封「勝った・・・」

模擬戦だというのに全身傷だらけだった事を見る2人の戦いはすさまじい戦いだったと見られる。

公和「今日はここまでよゆつくり休んで明日私に挑みなさい」

玲封「はつはい」

私は即行自分の部屋に向かった、実は言いつもう疲れて倒れそうだ

つたからである。

翌日・・・

公和「おはよー、さあ行くわよ」

玲封「お願ひします！」

私は馬に飛び乗りランスを構えた。

公和「それも西洋の物？」

そう言いながら公和はゆっくりと馬に乗り偃月刀を構えた。

玲封「はい！」

公和「赤く染まって真ん中には十字が刻まれてて綺麗ね」

玲封「はい、私も一目見て惚れました」

公和は少し顔の表情を変えた。

公和「でも武器は綺麗が大事ではないわ、効率よく敵を倒すかよ」

玲封「わかっています。お飾りではありますんこのランスはー」

公和「それなら貴女の実力と武器の性能を見せてもうつわ

公和「我が名は公和、義勇軍雷神の將軍なり、尋常に勝負せよー」

玲封「我が名は玲封、その勝負受けてたちます！」

言葉と同時に2人は一斉に馬を走らせた。

ガンキンゴキンガンキン・・・

玲封は偃月刀の攻撃をランスで弾きながら好機を狙っていた・・・そして公和は目にも止まらぬ速さで斬撃を繰り返していくた、他人から見ると明らかに玲封が押されているように見えた。

だが実際は違かった、玲封も隙を見せた瞬間攻撃していくたが偃月刀で防御されていた。そんなことが10分間続いていたが・・・

? ? ? 「その勝負、引き分けと見なす」

突然判定が下され引き分けで終わってしまった。

公和「兄さんまだ勝負が終わってません！」

そう私達の勝負を止めたのは公秦様でした。

公秦「燐！あくまで試験だこれ以上やり続けるとどちらか死ぬぞ！」

その言葉に2人の手は止まった。

公和「死ぬ？大げさな事言わないでください！」

公秦「ではお前の身体をよく見ろ！」

私は体を見た、そこには無数の切り傷があり血が止まることなく流

れていった。

そして・・公和様もあちらこちらに傷があつた、さうにもつ少しで致命傷にもなりそうな傷さえもあつた。

公和「・・・わかりました」

公秦「分かれればいい、手当てした後俺の所に来い結果を発表する」

手当てを終えた後、急いで公秦様の所へ向かつた。

公秦「玲封 海栄お前の所属を発表する」

玲封「はい！」

公秦「玲封、今日から君は親衛隊隊長だ、しつかり俺達を守つてくれよ」

玲封「えつはつはい！」

私は嬉しかった何故つて？親衛隊配属の条件は全ての科目が最高な者のみしか配属されないからだ。それに夢に近づけた事が何よりも嬉しかった。

こつして私玲封は親衛隊隊長に任命されたのだった。

試験、少女の夢（後書き）

第11問、公泰に一目ぼれする娘は誰だ？

1 関羽

2 黄蓋

3 夏侯惇

4 劉備

さて誰でしょう？次回からは黄巾党編です^ ^

軍儀、黄巾党殲滅作戦（前書き）

11問目の答えは・・・4番劉備でした。

本文をどうぞ♪^ ^

軍儀、黃巾党殲滅作戦

初陣から2ヶ月がたつた。兵舎も無事に完成しあまけに訓練場まで作つてもらえた。あのオヤジに頼んで正解だつたな。それから志願兵が増え今では3万の軍になつていた。

数日前朝廷から一通の手紙が届いた・・・実は?陵の太守に渡された物だが太守は自分より相応しい人がいると言い俺に手紙を渡したの物だ・・・。

公秦「やつと張角達と対面か・・・」

公和「・・・?何か言いましたか?」

公秦「あついや何でもない」

俺は少し驚いた、地獄耳か公和の耳は?

李駿「そろそろ見えてくるぞ」

公秦「わかつた」

言われたとおり5分もしないで様々な旗が掲げられた殲滅軍の駐屯地が見えてきた。

公秦「・・・許昌の曹操に、江東の孫策、西涼の馬騰（馬超）、幽州の公孫賛、平原の劉備、冀州の袁紹、それに袁紹の従妹の袁術・・・ほぼ恋姫キヤラ集まつてるな・・・」

公和「恋姫キヤラ?なにそれ?=??」

公秦「うつ何でもない」

これで確信した公和は地獄耳だという事を、てか俺は小声で言つてるのでこの軍勢の中によく聞こえるな公和・・・

そう歩いていくと

警備兵「貴様ら何者だ!」

俺達は門番に呼び止められた。

公秦「は?よく見ろ牙門旗を」

牙門旗には煌びやかと雷の文字が掲げられていた。

警備兵は一気に真っ青になつた。

警備兵「あつ貴方方が噂の義勇軍ですか?」

公秦「そうだ、通してもらひうござ」

警備兵「失礼しました!」

警備兵は敬礼し見送つた。

公秦「俺は代表達を見てくる、後は頼んだ」

將軍達『御意』

（天幕内）

？？？「遅いわね何しているのかしら？」

？？？「時間は守らなかあかんて・・・」

？？？「遅いですね・・・」

？？？「まあまあまだちょっと過ぎただけよ」

突然伝令が入ってきた

伝令「申し上げます、？陵の太守様が推薦された例の義勇軍が到着しました。」

？？？「わかつたわ下がりなさい」

伝令「はっ」

伝令が出た瞬間1人の男が入ってきた。

公秦「遅れですまん、義勇軍雷神頭首、公秦 玄龍だよろしく頼む

張遼「うちは朝廷軍の張遼 文遠や、よろしく頼む

曹操「私は曹操 孟徳よ、早く座りなさい」

劉備「わつ私は劉備 玄徳です公秦さんよろしく～」

孫策「久しぶりね公秦、ちょっとかっこよくなつたわね

曹操「貴方？孫策と知り合いなの？」

公秦「知り合いでいうか・・・『命の恩人よ』まあそうだな」

俺、孫策以外『！』

曹操「まあいいわ、本題に入りましょう」

そう言い曹操は席に座つていった、俺もそれに見習い席に座つた。

曹操「敵の根城は半里先の古城よ、左右には切り立つた壁背後には崖があるわそのため正面しか大軍が置けないのが不便だわ」

公秦「・・・ちょっと待て視点を変えれば奴らに逃げ道は無い、兵糧攻めでいいんじやないか？」

曹操「確かに兵糧攻めもいいけど時間が掛かるしこちらの食料にも限度があるわ」

渾れを切らしたのか突然でしゃばりお嬢様が話しに入ってきた

袁紹「おっほほほそんな相手私の華麗な軍隊で殲滅してあげますわ」

一気に場が沈黙した・・・さすがお馬鹿の代表だな・・・

曹操「・・・まあそれでいいわ、前衛は袁紹、左翼は私、右翼は孫策、後は後方で待機でいいわね」

返事は無かったものの反対意見は無かつたのでそれに決まった。

曹操「作戦結構は3日後の朝よ」

曹操以外『承知』

俺達は天幕から出て行つた・・・が

雪蓮「陸」

雪蓮はいきなり抱きついてきた。

陸「おわつ何だ雪蓮か」

雪蓮「何よ久しづびりの再会なのにその顔は、ぶつぶつ

陸「すまん長旅で疲れててな」

雪蓮「それなら仕方が無いわね、今日はゆっくり休みなさい

陸「そうしてもうう」

俺は自分の陣営に戻つた。

陸「燎いるか?」

燎「なんでしょう主?」

陸「隠密隊を率いて敵の根城から兵を捕縛して来い」

燎「はつわかりました」

そつ言いとこつとの間にか燎は消えていた。

陸「何時もながらす」になあいつは

そつ言い俺は眠かつたのでそのまま寝付いた。

（曹操 side out）

曹操軍天幕（

曹操「それにしてもあの義勇軍のあの頭^{かしら}首^{くび}中々見込みあるわ」

荀？「！？」

荀？「華琳様、では一刀と比べるとどうですか？」

華琳「断然、あのおどり公秦よ桂花」

桂花「そうですか・・・」

桂花は少し顔を落とした。

華琳「安心しなさい、私が欲しいのはあの男の知性よ

桂花の顔がパアツと明るくなつた。

華琳（桂花嘘ついてじめんね、本当は“両方”興味があるわ）

（曹操 side out）

～劉備 s.i.d.o～

劉備軍天幕～

関羽「桃香様へど」ですか？」

劉備が見当たらないので関羽は探していたのだった。

桃香「愛紗ちゃんどうしたの？」

ひょ～っと突然現れたので関羽は少し驚いた。

愛紗「ビーハしたのではありますん、ビーハに行っていたのですか？」

ちよつと怒り気味で桃香に言った。

桃香「ちよつと外の星を見てたの」

愛紗「なぜ星を？」

??.??.「お主にはわからぬのか？」

愛紗「星突然話しに入つてくるなー。」

星「やはつ愛紗は初心よの」

愛紗「どつこつ意味だ？」

星「いじままで言つてわからぬのか愛紗よだからお主はその歳になつ

ても接吻さえもできない・・・『つるさい！私はまだそんな歳ではない！』接吻くらいはもう終えてもいい頃では無いのか？」

愛紗は黙ってしまった・・・

星「つまり桃香様は恋をしたのだ」

関羽「なつ！」

星「とうとう桃香様にも春が来たのだよ」

愛紗「相手は誰ですか桃香様？」

振り向いたら桃香様は真っ赤な顔で倒れていた。

愛紗「桃香様！」

愛紗は急いで桃香を持ち上げた。

星「相手はおそらく遅れてきた義勇軍の頭首だな」

関羽「近頃噂されてるあの義勇軍か？」

星「おそらくな」

その後桃香様を寝室に運びこんだのだった。

愛紗（桃香様が惚れた男少し気になる・・・明日例の義勇軍に行つて見るか・・・）

そうして寝付いたのだった。

（劉備 S·i·d·o o·u·t·）

（孫策 s·i·d·o·~）

雪蓮「んんん~」

〔冥琳〕「やけに上機嫌だな雪蓮」

雪蓮「公秦に会つてきたのよ」

〔冥琳〕「おお、やはり噂の義勇軍は奴が率いていたのか」

雪蓮「それに私好みにかつゝよくなつて嬉しいのよ」

〔冥琳〕「そうち良かつたな雪蓮」

〔黃蓋〕「その話儂にも聞かせてくれないか？」

雪蓮「そうねあの時祭はいなかつたもんね、教えてあげる」

雪蓮は祭に公秦と出会つた時のことを話した。

祭「それーるがんとは何じゅ？」

雪蓮「私にも多少しかわからぬけど雷の力つて言つてたわね」

祭「雷の力だと？聞いた事が無いな」

雪蓮「そういえば」いつ頃でたわね特別な能力つて

冥琳「氣を使つた能力じやないのか？」

祭「少なくとも儂が知る中では氣を雷に変えるなどありえん事じや」

雪蓮「そつなると陸は何者なのかしら？氣になるわ」

冥琳（・・・また始まつたか雪蓮の癖が・・・）

冥琳（だが確かに氣になるな・・・間者でも出しどとくか）

こゝにして密かに間者を公奏に送つた冥琳だった。

～孫策 si d o o u t ～

他の陣営の事も知らず安らかに俺は眠つていつた。

軍儀、黄巾党殲滅作戦（後書き）

久しぶりの投稿です^ ^

やつぱり星と霞の言葉遣いが難しいです^ ^

それでは第1~2問蜀の次に雷神を追う軍は何処でしょ^ ^..

1 魏軍

2 朝廷軍（張遼）

3 公孫贊軍

4 西涼軍（馬超）

わかつたかな？次回をお楽しみに^ ^

休息、一時の安寧（前書き）

黄巾党殲滅作戦の間の出来事です。

休息、一時の安らぎ

翌朝

陸「ん～よく寝たな」

ふと見ると雀が鳴いていた

陸「大体7時頃か・・やることも無いし鍛錬でもするか」

俺は刀を持ち外へ向かつた。

陸「せい！やあ！はあー！」

あつという間に1時間が越えていた。

公秦「そろそろ終わるか・・・とその前にそこに隠れている奴姿を見せる」

2人『！』

2人は驚いた表情で姿を現した

・・・関羽に周泰か面白い組み合わせだな

公秦「何が目的だ？偵察か、それとも暗殺か？」

関羽「ちつ違う私は噂の義勇軍を一日見たかつただけだ」

公秦「ならなぜ堂々と見ない？怪しまれても仕方が無いぞ」

関羽「すまなかつた、以後氣をつける」

公秦「でアンタは何処の間者だ？」

周泰「なぜ間者だと？」

公秦「俺も馬鹿じやない服装を見ればわかる」

周泰「……言えません！」

・・・ちよつと引っかかるか。

公秦「もしかして、雪蓮のとこか？」

周泰「なぜそれを！・・・あつ」

見事に引っかかった、訓練が甘いな周泰

公秦「正体もバレたことだし、正直に話したらどうだ？」

公秦「何の目的で俺を探っていた？」

周泰「・・・貴方の秘密についてです」

公秦「そつか・・・雪蓮にこいつ伝えろ、時期がきたら直接話すと

周泰「・・・わかりました」

俺は少し考えた・・・よし

公秦「朝飯食べてくか?」

関羽「別に腹など減つて『ぐ~』頂こう//」

周泰「いいんですか?」

公秦「決まりだな、食堂へ行くか」

周泰「はい!」

関羽「・・・ああ

途中釣り帰りの太史慈を捕まえた

公秦「よう、太史慈釣りはどうだった?」

太史慈「文句なしの大漁よ」

公秦「それはよかつた」

太史慈「??」

公秦「俺達3人に取れたての魚食べさせてくれないか」

太史慈「いいけどこの子達誰?」

公秦「そうだったな、自己紹介がまだだった」

公秦「俺の名は公秦、字玄龍だ」

関羽「私は関羽、字は雲長だ」

周泰「私は周泰、字は幼平です」

太史慈「私は太史慈、子義よ」

公秦「つて事で頼む」

太史慈「・・・まあアンタが言う事だし作ってあげるわよ」

公秦「すまんな、美琴」

美琴「いいわよ、陸」

美琴は厨房に入つていった。

陸「よし空いてるとこに座つていいぞ」

周泰「おまかせします」

関羽「同じく」

陸「・・・じゃあ厨房に近いところに座るか」

2人『はい（ああ）』

俺達は一番厨房に近いところに座つた。

数分後

美琴「お待ちかどりさま、単純に塩焼きよ」

陸「おつ鮎の塩焼きかつまそつだな」

周泰「おこしそうです」

関羽「いい匂いだ」

山ほどどの鮎の塩焼きがおかれた。

美琴「さあ、どんどん食べてね」

3人『いただきます』

いただきますと同時に周泰達は食べだした・・・よほど腹をすかせたんだな。

周泰「モグモグ」

・・・やばい可愛い、可愛い食べ方をするのは呂布だけかと思つたが周泰の食べ方のいいな、比べて関羽は・・

関羽「ハムハム」

上品に食べるな、周泰は可愛いと思つが関羽は綺麗だと思つな（あくまで食べ方だぞ）

そう思い一人の食べ姿を見ていると・・・

ダッダッダッ

公和「兄さん、その女達は誰ですか！」

公和が飛び込んできました。

公秦「公和！客人に失礼だぞ！」

俺は強く叱つた、そりゃ行儀が悪いからな。

公和「すっすいませんでした」

事情を聞いて自分が早とちりしてしまったことに謝つた

公秦「わかれればいい

公秦「劉備軍の关羽、孫策軍の周泰だ」

公和「私は義妹の公和です」

公和が加わり話がもつと弾んでいった。

食べ終わると2人は帰ろうとしたので俺は止めた。

公秦「もう少し見てかないか？」

2人「え？」

周泰「いいんですか？」

公秦「侘びのしるしだから、いいわ」

周泰「ならほかの武将たちが見たいです！」

関羽「私も気になるな、私もそれでいい」

公秦「よし決まりだ、公和行くぞ！」

公和「はっはー」

俺たちは食堂を出て、武将の元に向かった。

ガツキガンキン

李駿と嘉威が組み手をしていた。

公秦「よつ、李駿、嘉威」

嘉威「どうされましたか主？」

李駿「後ろの2人見慣れない奴だが客人か？」

公秦「ご名答、そのとおりだ」

関羽「関羽と申します」

周泰「私は周泰です」

李駿「俺は李駿だ」

嘉威 「嘉威だ」

その後俺達は2人の組み手を見学させてもらつた。
そして2人は組み手を見た後礼を述べ自分の陣へ帰つていたのだった。

休息、一時の安らぎ（後書き）

外伝的な物です多少本編に関わってくるかもしません。

決行、張三姉妹救出作戦（前書き）

前回の答えは2番朝廷軍でした。

ちなみにあくまでも書いているのは恋姫無双ですですので三国志と違つるのは当たり前ですそれでも構わない方は進んでください^_^

決行、張三姉妹救出作戦

翌日、燎は100人程度の捕虜を捕まえて帰ってきた。

燎「主およそ100人を捕縛してきました」

陸「さすが燎だな、」苦労だつた。」

燎「ありがたき幸せ」

俺は捕縛した黄巾党100人と面談した

黄巾党達は震えながら絶望した顔でこちらを見ていた。

黄巾党1「・・・俺達は殺されるのか?」

公秦「場合によつてはな」

黄巾党2「・・・死にたくない」

黄巾党3「・・・死ぬ前にもう一度張角様に会いたい」

公秦「人の話を聞け!」

黄巾党達『ひいつ』

公秦「今の黄巾党の状況を教える」

少し沈黙した後黄巾党の1人が喋つた。

黄巾党「俺達は元々はただの追っかけだったんだ」

公秦「ならなぜ反逆者になつたんだ?」

黄巾党「・・・それは・・・すべてあの工口役人が悪いんだ」

公秦「どうこいつことだ?」

黄巾党「役人が権限で張角様達を襲おうとしたんだ」

公秦「なつ!」

「ど」「まで腐つてんだ漢は・・・

黄巾党「俺達は何とか張角様達を助けたんだ」

黄巾党「役人は怒つて重税にしたんだ、その後元に戻してほしければ張三姉妹を渡せつて言つて來たんだ」

公秦「・・・」

黄巾党「俺達は対抗した・・・役人は軍を使つて黙らせようとしたが俺達の方が上手で勝つたんだ、その後はお尋ね者になり今になつたんだ」

公秦「・・・そうか、決めた」

公秦「お前達を全員生かしてやる」

黄巾党『！』

公秦「但し全員俺の軍に入つてもうがそれでもいいか？」

黄巾党1「張角様達の安全を保障してくれるなら・・・な？」

黄巾党達『ああ・・・』

公秦「よし、決まりだな」

公秦「嘉威！」

嘉威「なんでしょう？」

公秦「女の死体を二つ集めて来い」

嘉威「人を殺せといつ事ですか？」

公秦「最悪な場合な、だがなるべく殺すのはやめてくれ」

嘉威「はつ仰せのままで」

公秦「頼んだぞ、お前に懸かっているからな」

嘉威「ハツ」

そう言つと嘉威はいなくなつていた。

公秦「後一つ聞きたい」

黄巾党「・・・？」

公秦「張三姉妹の顔はバレているか？」

黄巾党「バレていません、役人は倒しましたから」

公秦「そうか、なら安心だ」

公秦「じゃあ今から俺の軍の鎧を着ろ」

黄巾党「なぜですか？」

公秦「偵察を出したように見せてお前達を逃がす、お前達は仲間を説得させ夜、門を開かせろその後俺達が入る、安心しろ俺の軍の半分は元農民だから悪さはない」

黄巾党「わかりました」

その後、捕縛した奴らを偵察に出したように見せて逃がした。

1時間後、燎は死体を3つ持つて帰ってきた。

陸「早かったな」

燎「病で亡くなつた娘を貰つて来ました」

陸「よくやつた」

その夜

公秦「黄巾党に奇襲をかける、俺に続け！」

兵達『オー！』

俺達は根城に向かつた

その頃・・・他の殲滅隊はと言つと・・・

魏軍

春蘭「華琳様たつ大変です！」

華琳「どうかしたの春蘭？」

春蘭「例の義勇軍が単独で敵に進軍中です！」

華琳「わかつたは直ぐに出陣の仕度をしなさい」

春蘭「御意」

春蘭は天幕を去つた

華琳「ふふふ、誰が出るとは考えていたけどまさかあの義勇軍とわ
ね・・・ますます興味がわいたわ」

呉軍

伝令「孫策様、周瑜様大変です！」

孫策、周瑜「どうした（の）？」

伝令「義勇軍が動きました！」

周瑜「何！」

孫策「先を越されたわね・・・さすが公泰ね」

孫策「冥琳、私達も義勇軍に続くわよー！」

冥琳「わかっている」

孫策「全軍進撃！」

兵達『オー！』

蜀軍

星「愛紗大変だぞ」

愛紗「どうした星？」

星「義勇軍が動き出した、それに続いて吳軍、魏軍も追っている」

愛紗「なつ」

愛紗は少し考えた後言った

愛紗「桃香様、我々も動いたほうがよろしいのでわ？」

・・・と桃香に言つたが・・

桃香「さすが公泰様…………」

・・・駄目だ桃香様が妄想モードに・・・

愛紗「朱里はどう思つ?」

朱里「私は動いた方がよろしいかと・・・」

愛紗「桃香様、」決断を

桃香ははつと我に返り言つた。

桃香「わつ私たちも行かないと」

愛紗「御意」

愛紗「我々も追つぞ!」

兵達『オー!』

朝廷軍

兵長「張遼様!」

張遼「どうしたんや?」

兵長「義勇軍が単独で敵に進軍、続いて呉軍、魏軍、蜀軍も追つて
います」

張遼「なんやでー！」

張遼「・・・しゃあない、つかうちも行くでー。」

兵長「はつ！」

張遼「義勇軍を追うでー。」

兵達『はつー』

その他の諸侯も吳、魏、蜀、朝廷、に続いて動きだしたのだった。

敵根城前

公秦「全軍停止！」

その一言で全員の足が止まった。

公秦「これから戦うこと聞いてくれ」

公秦「俺は秘密裏に黄巾党と交渉した、もう直ぐ門が開くが中の人
は殺すな、俺達の仲間だ、この事覚えといてくれ」

兵達は少し悩んだ後頷いた

兵達『はつ』

その言葉と同時に門が開いた。

公秦「全軍、進め！」

兵達『オー！』

少し警戒されていたが普通に入れた。

俺は逃がした奴らに近寄った。

公秦「張角殿はどちらに？」

黄巾党「こちらです」

俺は馬を降り張角の所へ向かつた。

そこには3人の美少女が立っていた。

ショートで紫色の髪をしたメガネ娘が話してきた

？？？「貴方が公秦殿？」

公秦「いかにも、俺が公秦玄龍だ」

？？？「私は末っ子の張梁といいます」

張梁「本当に私達を救つてくださるんですか？」

公秦「ああ、但し黄巾党の人達には俺の軍に入つてもううがな」

？？？「ちーは信じられないな～」

横から水色の髪をしたサイドボニー・テイルの貧乳娘が話しごとつて

きた。

張梁「張宝姉さん！」

張宝「だつてまだ会つたばかりの人を信じろなんて・・・」

張梁「確かにそうだけどこれしか私達全員が助かる方法が無いですよ」

「？？？「私は信じる！」

そつ言つたのが大きなリボンを着けて桃色の髪をした巨乳娘だった。

張梁「張角姉さんと同じです」

張角「だつて嘘だつたら今直ぐにでも殺せるでしょ・・・でも今この男に殺氣は無いもん」

その言葉で張宝が納得したらしく交渉は成立した。

張角「私の真名は天和です」

張宝「ちーは地和だよ」

張梁「私は人和」

公秦「俺は陸だよろしくな

俺は笑顔で言つた

その瞬間3姉妹は顔を染めた。

管理者「・・・ちいつ奴の笑顔は化け物か！」

ん？どうからか声が聞こえたんだが・・・

気のせいかな・・・

その後皆に雷の旗を掲げだ。

一方その頃4軍はとすると・・・

呉軍

伝令「義勇軍が根城に侵入しました！」

周瑜「なつなんだと！」

孫策「どうやつて入ったのかしら？」

伝令「それが・・・門が開いて中に入りました」

孫策「開いて？破つてじゃないの？」

伝令「いえ開いてです」

周瑜「・・・これで手柄は奴らに奪われたな・・・

孫策「全軍、撤退よ！」にいても意味無いわ

その言葉を始めた際に軍は駐屯地に戻つて行つた。

魏軍

春蘭「華琳様、義勇軍が砦を占拠しました」

華琳「そう? それなりにいる必要は無いわね、全軍撤退」

春蘭「余り驚いた様子は無いんですけど?」

華琳「義勇軍が動いた時点で負けは決定していたわ」

春蘭「なぜですか?」

華琳「幾ら? 陵の雷と言えども倍近い相手を単独で攻める事は出来ない、それなのに動いたつまり確實に自分達が勝つ方法があったのよ、だから今際いつたって後の祭りよ」

春蘭「・・・そうですか・・・」

華琳（ますます興味がわいたわ・・・直接会いに行こうかしら?）

蜀軍

? ? ? 「愛紗大変なのだ!」

愛紗「びびじた鈴々?」

鈴々「義勇軍が砦の中に入つたのだ!」

愛紗「……」

愛紗はそれを聞き急いで桃香に知らせた。

愛紗「桃香様、義勇軍が皆に侵攻したと情報が！」

桃香「えつ？ 公秦様が？」

突然鈴々が割り込んできた。

鈴々「皆に雷の旗が掲げられたのだ！」

その場にいた全員『！…』

愛紗「本当か鈴々？」

鈴々「本当なのだ、ちゃんと雷って書いて書いてあつたのだ」

桃香「きやつす』へいさすが公秦様／＼／＼

愛紗「桃香様！」

その後桃香は愛紗にキツイ説教をされたのは言つまでも無い。

朝廷軍

兵長「張遼様！」

張遼「どうしたんや？」

兵長「義勇軍が砦を制圧しました」

張遼「んなアホな・・・」

兵長「確かに砦に雷の旗が掲げられてます」

張遼「わかった、全軍撤退や駐屯地に戻るで」

兵長「はい」

張遼（なんぢゅうつ男や・・・せいか一時間しないで終わらすなんて）

張遼（明日の報告が楽しみや）

いつて黄巾党の乱は幕を閉じたのであった。

決行、張三姉妹救出作戦（後書き）

問題を修正します。

第13問次話劉備がお酒を飲んでしまいますて誰から送られたお酒でしょうか？

1 張遼

2 孫策

3 太史慈

4 曹操

さてどれでしょうか？次回をお楽しみに

報せ、無傷で終えた一戦（前書き）

13問目の答えは2番孫策でした。
反董卓まであと少しです^_^

報告、無傷で終えた一戦

乱の翌日俺は張遼に報告に行つた。

兵長「張遼様、公秦様がお見えに」

張遼「わかつた通しも」

兵長「はつ

公秦「張遼様、『報告』に参りました」

張遼「わかつた書いてみ

公秦「はつ

公秦「我が軍が黄巾党を鎮圧、張三姉妹の首を持つてきました」

張遼「あ～聞きたいのはそこじゃう

張遼「何で1時間もしないでしかも無傷で鎮圧した理由を聞きたいんや

公秦「・・・実はお・いや自分の部下の間者がへまをしまして黄巾党に捕まつたんです」

張遼「アンタは俺が似合つてるから戻してくれへんか?」

公秦「わかりました、その後部下と一緒に文が届いたんです、その文章には夜に門を開ける、単独で来てくれと書かれてましたそしてあの夜俺達は指示通り門の前に行くと独りでに門が開き、俺達ははいることが出来ました」

張遼「・・・敬語もやめてくへん?」

公秦「入った後は首謀者である張角殿と話した、内容は我らの命をやるからそれ以外の者を生かしてくれと言う内容だった。俺は感心した、自分の命を引き換えに仲間を助けてくれだなんて・・・俺は殺したくなかったでも殺すしかなかつたんだ、涙を流しながら3人の首を斬つた以上が内容だ」

公秦「約束だから残つた黄巾党全てを俺の配下にしたい、それ以外は何も要らないから頼む」

俺は土下座をした、それを見た張遼は驚いたらしかつた。

張遼「わかつた・・・認めたる」

張遼「首確認させてもらひつてかまへんか?」

公秦「どうぞ」

俺は身代わりの首を差し出した。

張遼「・・・似てへンな」

公秦「彼女達は義姉妹だったようです」

張遼「せやな・・・それなら似てへんのもおかしくない」

張遼「わかつたで・・・報告ありがとな、帰つていいで」

公秦「はつ失礼します」

・・・

張遼（あれは嘘やな、多分この首もちやう者やろ・・・まあええか、次会つ時はたのしみにしてるで）

義勇軍陣営へ

汪牙「どうだつた？」

陸「何とか騙せた」

汪牙「よかつたな・・これでもう安心だな」

陸「ああ・・・」

陸（本当にあれで騙せただろうつか・・・）

その後天和達を呼んだ。

陸「君達の配属を教える」

彼女達はドキドキしていた。

陸「君達は応援隊をしてもらいたい」

3人「応援隊?」

陸「まあ簡単に言えば黄巾党になる前にしていた事するだ」

人和「つまり、歌芸人に戻れるの?」

陸「そうだ」

その言葉に3人は飛び跳ねた。

陸「但し、？陵のみでだがな」

陸「主に兵への安らぎだが月2、3度町で歌う事も考えている」

その言葉にもつと喜んだ3人だった。

こつして3人の配属が決まった。

その後俺は鍛錬をしにいった。

一方その頃蜀軍では・・・

愛紗は必死に桃香を押させていた。

愛紗「星!貴様も桃香様を止めるのを手伝え!」

星「何いつておるかこれからが楽しくなるの」「こ

愛紗「・・・仕方が無い、鈴々手伝ってくれ!」

鈴々「桃香お姉ちゃんを行かせてあげればいいのだ」

桃香「行かせてよー、愛紗ちゃん」

愛紗「なりません、今の桃香様が行けば相手に迷惑がかかります」

桃香「大丈夫だよ、ただ見るだけだから」

愛紗「見るだけじゃおそれなくなります、絶対に」

そんな事を何度も繰り返していたのだった・・・

・・・ついでい、隣の天幕からか・・・

「ギャアギャア」

「クチヤクチヤ」

「ドタドタ」

・・・プチッ、余りにもつるさすぎて堪忍袋の緒が切れた。えつ短
氣だなだと?なら例てるなら間近で族のバイクの騒音が聞こえる
のと一緒だぞ、耐えられるか?俺は無理だ・・・

陸「絶対に文句いってやる!」

俺は俺の事で揉めているのも知らずイライラしながら隣の天幕に向
かつた。

公秦「失礼する」

蜀全員『！』

一斉にその場にいた女達がおれに注目したが俺はそんなことお構いなく言つた。

公秦「隣の者だ・・『公秦様』『なつ？？』

いきなり劉備に抱きつかれた、わけがわからん・・・

公秦「いきなりなにする／＼／＼

れつせの抱きつきでイライラが吹き飛んだ

愛紗「すっすいません、桃香様！」

桃香「ふえ～ウイクッ」

・・・酔っ払っているのか

愛紗「すいません、主が失礼な事を・・・」

公秦「いやいい、その様子だと酒に酔つてそうだが」

愛紗「そのとおりです、実は・・・」

愛紗「呂の孫策様がお酒を持つててくれたんです、しかもそのお酒は強く一杯飲んだだけで酔いそうになりました・・・それを桃香様が水と間違えて2杯飲んでしまって今の状況に・・・」

公秦「……それはわかつたが何故俺に抱きつくな？」

蜀の武将達『……』

愛紗（まさか理由がわからないのか？鈍感にもほどがある）

星（もひと画面へなじうだ）

鈴々（鈴々でもわかるのだ）

朱里（男の人って鈍感なのかなあ？）

離里（そつなのかなあ？）

少し沈黙が続いた……

そして愛紗が一言しゃべった。

愛紗「そんな」と自分で考えてください」

公秦「……ああ

公秦もその言葉で少し理解したようだった。

公秦「俺は邪魔だな……帰るとするか」

やつらに歩こすると桃香が強く抱きついて俺を放さなかつた。

公秦「……酔いが覚めるまで居るしかないな……」

愛紗「すこません」

愛紗は何度もペコペコと謝った。

公秦「気にするな」

趙雲が突然話してきた。

星「一つ質問よろしいか?」

公秦「ああ、構わない」

星「何故義勇軍など自ら作られたのか?」

公秦「・・・」

星「お主なら他の者の配下になれば優々と武将になれたものの」

公秦「確かに普通ならそつだ・・・だが俺は下にひくのが嫌いなんだ、だから自らが指揮を執ってるんだ」

星「本当にうか?」

公秦「・・・」

黙つてこると今度は諸葛亮が話してきた。

朱里「・・・あの~」

公秦「どうした？」

朱里「貴方が救出した3人の少女、張姉妹ですよね？」

公秦「……」

蜀の武将『……』

朱里「その反応……やはりそうでしたか」

俺は驚くしかなった……さすがは少女になつても諸葛亮は諸葛亮
だな……

公秦「……さすがは臥龍見破られたか……」

朱里「……もしよかつたら真相を話してくれませんか？」

俺は悩んだ……嘘もついてもいいが見破られるのもオチなら素直に
言つか……

公秦「……但し、誰にも言わないと約束してくれますか？」

朱里「もし破ると？」

公秦「検討はついていると思いますが破つたら我が軍全力で貴女方
を潰さなければいけません」

その瞬間蜀の武将達はぞつとした。

朱里「わかりました。覚悟は出来ています」

公秦「わかった……実は……」

話が終わると諸葛亮は納得した様子だった。

朱里「そうだったんですか……わかりました、秘密にしておきます」

公秦「ああ、頼む」

その後ようやく桃香が寝たので寝室に運んで俺は自分の陣営に帰つていった。

報告、無傷で終えた一戦（後書き）

14問？陵の太守は元々何をしていた人でしょうか？

1詩人

2旅芸人

3軍師

4肉屋

さてどれでしょう？

出世、新？陵太守（前書き）

14問目の答えは1番詩人でした、いよいよ義勇軍編は残す2話で
す楽しみにしててください^_^ 短いですが楽しんでください^_^

出世、新？陵太守

『お帰りなさいませ、公秦様』

・・・は？今俺達は状況がつかめなかつた。

話は少し前にさかのぼる・・・

俺達は12万の軍を率いてやつと？陵に戻つてきた。

公秦「久しぶりだなこの風景も」

公和「そうですね」

門が開くのを少し眺めていた。

門の開かれた先は見慣れた町並みがあつた。

俺達はゆっくりと進んでいった

子供「あっ、公秦様だ！」

子供の一聲でたくさんの人たちが集まってきた

女「おかえりなさい」

男「良くい無事で」

・・・

次々と声がかかってきた。

俺達は兵舎に向かおうとしたが・・・

使者「公秦様、富殿へ」

太守様の使者が来たので富殿に急いだ。

が・・・来てみるとやけに富殿が静かだった。

使者「こちりへ」

使者の言われるほうに向かっていくと大広間に着いた。

だがそこには太守の姿は見られなかつた。

そこで聞いたのがあの言葉だつた。

全く状況がわからない所に1人の文官が声をかけてきた。

文官「公秦様これをどうぞ」

渡された物は手紙だつた、俺は黙つて手紙を読んだ。

公秦殿へ

主がこの文を見ている頃にはワシはいないだろ。

突然だがワシは太守の任を解いた、訳はワシが無能だつたからじゃ
実はワシは太守になるまでは名のある詩人だつたのじや、詩人だつ
た時たまたま先々代の皇帝と会つてのう彼に気に入られて太守の任
を任されたのじや、無論詩人だつたワシは政治など出来なかつた。
ワシは文官に任せつゝきりだつた・・・ワシはそれではいかんと思つ
て色々努力した・・・じやが無理だつたそこでワシは息子達に託し
てみたのじや・・・だが失敗した、そんな時貴方方に会つたのじや、
ワシにとつて貴方方は救いの手だつた、貴方方のお陰で町は発展し
ていつた、それにワシら達が無理だつた賊退治さえも軽々と終わら
してしまつた・・・ワシは決心した、貴方方に太守を譲ろうと、そ
して貴方方が黃巾党退治に出掛けたの見計らつて朝廷に手紙を出し、
息子達を強引に連れてこの地を去つたのじや、最後にここに残る者
達は公秦殿に仕えたい者たちじやどうか雇つてほしい。

無能な太守より

公秦「・・・」

俺は黙つてしまつた

李駿「どうした?」

李駿は文を取つて皆に渡した。

公和「・・・えつ?」

太史慈「なによこれ・・・」

于吉「あらひ・・・」

嘉威「・・・なるほど」

延礼「・・・」

つまり俺達は大出世したってことだ。

なぜ黙つたて？いきなり平から部長になつたらどうなる？畠然してしまつだろそれが今の状況だ。

数分後我に返つて俺は改めて太守の椅子に座つた。

直後俺はまず治水工事を進め、夜間警備の強化を提案した。

文官達はそれに従い行動に移つた。

そして將軍達には兵の強化、新兵の教育を命じ自らも新兵の教育に励んだ・・・

後大工たちに軍事研究所と兵舎の建築を要求した。

そんなこんなで一月がたつた。

新兵たちも成長し強力な兵士になつていった。

治水工事を順調に進でいった。

大工たちに頼んだ兵舎は順調に進み、軍事研究所は完成した。

そんな中俺は軍事研究所で新技の研究をしていた

公秦「雷華雷翔陣！」

俺は鎌に電気を貯め矢を放つた、案山子に射抜いた途端電撃が周囲に放たれた約直径10m範囲だろう・・・。

公秦「・・・技は完成しているだが・・・1人だけじゃ貧弱だ、かと言つてそのまま他の兵が矢に触ると感電死してしまう・・・くつ何かいい手はないか・・・」

俺は悩んでいたのだった・・・。

出世、新？陵太守（後書き）

第15問次の回とあるの衣装が出てきますので最初に出てくる衣装はなんでしょうか？

- 1 榎川中学の制服
- 2 常盤台中学の制服
- 3 上條さんの所の制服
- 4 境天使エロメイド

わざわざでしょ？、ちなみにこの衣装は全て出ますので^_^

調達、必要不可欠な物（前書き）

答えは2番常盤台中学の制服でした^_^、今回も短いですが楽しんでください。

調達、必要不可欠な物

一月たつたある日俺は太守の仕事をフケて街探察に行つていた。

公秦「この前は南東行つたから、今回は南西に行つてみるか」

俺は南西に向かつた。ちなみに今は変装中である。（バレたら宮殿に戻されるから）

?陵の町は意外と広い、まあ、洛陽、許昌に比べれば小さいがベスト10に入るほど広い街なのである。なので1日では回りきれない、北東、北西、南東、南西に分けて探索している。南西エリアは主に職人達が集うエリアなのでそれなりに期待している。

公秦「思つたより色々店あるな」

鍛冶屋を始め裁縫屋、装飾屋、武器防具屋、家具屋、茶屋（ここでの茶屋はお茶専門で売つているお店のことである）骨董屋、呉服屋、様々な店が建つていた。俺は一つずつ回つていたが中々欲しい物はなかつた。

公秦「南西もだめか・・・次は洛陽でも行つてみるか・・・」

俺は諦めかけていると・・・何処からか男の声が聞こえた

男「どうした?そこの若者よ」

男は声を掛け近寄つてきた。

公秦「欲しい物が無くてな・・・」

男は不意に笑つたように見えた

男「ここの先の路地を曲がつてみるといい」

ちゅうと不安に思ったが行つてみようと思つた

公秦「ありがとう、行ってみるよ」

俺は男の言われた通り先の路地を曲がつていった。

公秦「・・・なんか雰囲気が変わったな・・・」

その先は色々珍しい店が並んでいた。

公秦「・・・ここならあるかもな」

俺は一つの店に入った。

公秦「・・・これは」

そこにあつた物ははすこかつた。何故この世界にこんな物があるのかわからなかつた。

公秦「とつ常盤台中学の制服・・・それに上条さんの高校の制服、堕天使メイド＆堕天使エロメイド・・・なんでこんな所に禁書目録の衣装があるんだ???」

店長「お姫さん用がいいですね・・・それは新作ですよ、ふふふ」

公秦「これはオリジナルか?」

店長「当然ですよ」

・・・買おう、常盤台の制服は太史慈で上条さんと一は嘉威、墮天使系は干吉・・・いいな。

公秦「オヤジ、それとこれとあれを頼む」

店長「毎度あり」

その後違う店を覗いてみると・・・

公秦「今度は柵川中学（佐天さん＆初春の中学生）の制服、一騎当千の南陽学院の制服・・・」

柵川中学の制服は延礼と玲封、南陽は李駿でいいな。

公秦「それをひとつとあれを頼む」

店長「毎度ありがと」

・・・おもわぬ買い物をしてしまったが後悔はしなかった。

公秦「よし後はあれをさがすか・・・」

そして俺は色々な店を回つたそしてやつと最後に目的の物を見つけた。

公秦「おつかせやん、この生地で手袋作れるかい?」

俺は今とある服を持つている。

店長「やつてみなきや分からないな・・・」

公秦「頼む、作ってくれ金はこくらで出でます」

店長「・・・わかつたで幾つ欲しいんだ?」

公秦「合わせて100作ってくれ

店長「わかつた、取り込もう」

公秦「ありがたい」

俺は上機嫌で宮殿へ帰った。

その後、李駿&玲封に説教された、まあ予想はしていたが。

1時間後、やつと説教から解放されてお土産を貰って渡した。

公秦「色々すまなかつた、侘びのじるじに貰つてくれ

各種わざまなリアクションをした。

美琴「・・・なによこれ、アンタ私にこれ着させんき?」

美琴はものすじへ怒りながら言った。

美鈴「・・・ふふふ、早速着てみようかしら」

美鈴は着替えるためその場を離れた

燎「ありがたき幸せ」

燎は無表情で礼を言つた。

汪牙「・・・」

汪牙は黙つてしまつた。

乱「なつなんですかこれ」

乱は顔を真つ赤になりながら言つた。

涙「公秦様から貰えるなんて感激です！」

涙は嬉し涙を流しながら言つた。

色々文句などあつたものの全員共ちゃんと着てくれた。

女性陣の衣装はものすじく似合つていた、まるで本物に会つている感じだつた特に太史慈は予想以上に綺麗だつた。

ああ・・・デジカメがあつたらな・・・美琴の姿撮れたのにな
と俺は少し残念に思つたのだつた。

美琴「ちょっとアンタまた変なこと妄想してると？」

陸「いや・・・そんなことない！」

美琴「本当〜？」

陸「・・・」

美琴「・・・まついいわ今回は許してあげるけど次変な物買つてき
たらわかつてるでしょうね？」

陸「はつはい！」

まあ多少あつたが無事に全員の変身姿を見れたので買ったかいがあ
つたと思つ陸であった。

調達、必要不可欠な物（後書き）

次はいよいよ反董卓連合編です、反董卓連合編は戦うシーンを増やしたいと思います。応援よろしくお願いしますm(—_—)m

真偽、眞実を知るために（前書き）

反董卓連合編スタートです、楽しんでください。^_^

真偽、眞実を知るために

あれを探し当てて1ヶ月たつた。無事にあれの製作に成功し今はあれを使う専属部隊を育てている。

公秦「構え！・・・狙いを定め、撃て！」

掛け声と同時に複数の矢が放たれる。その複数の矢が案山子に当たると電撃が放たれた。そう雷華雷翔陣である、がなぜ一般兵が放てるのかは謎に包まれていた。

そうしていると嘉威が突然現れた。

嘉威「公秦様、隠密兵が到着しました」

公秦「おつ・・・わかつた直ぐ向かう」

内心何処から来た？！と驚いた公秦だった。

俺はすぐさま大広間に向かった。

そこには親衛隊隊長、將軍達が既に集まっていた。

俺は隠密兵に状況を聞いた。

隠密兵「報告します、董卓の悪政の噂は定かではありませんが各諸侯は動きを見せています」

公秦「そうか、わかつた、下がつていいぞ」

隠密兵「はつ失礼します」

隠密兵が出た後俺達は言い合つた。

李駿「公秦今が好機だ、董卓を討伐し我々の名声上げよつ
よつ」「
于吉「私も賛成です、主の夢のため董卓には糧になつてもらいまし
よつ」

太史慈「私は戦えれば十分よ」

公和「私は兄さんに従います」

嘉威「同じく」

延礼「私もです」

玲封「主に従います」

どうしたらいいものか・・・俺的には董卓を助けたいし、董卓はそ
のまま洛陽を守つてほしい、そうなると反董卓だと助けれても洛陽
は魏の物になつてしまふそれは断じて許せん、やはり董卓に加勢だ
な、噂は嘘だと思つからな。

公秦「すまん、少し考えさせてくれ」

將軍達は頷いた。

俺はその場を去り寝室で少々睡眠した。

深夜 僕は李駿、嘉威を呼んだ。

李駿「どうした？何か用か？」

嘉威「推参しました」

公秦「率直に言つ、俺は董卓に加勢する」

2人『！』

李駿「どういう事だ？」

公秦「言葉通りだ、後俺は今から洛陽へ向かう、真偽を確かめる事と、同盟を結ぶためにな」

李駿は少し黙つた。

李駿「……じゃあ聞くがもし噂が本当だつたらどうするんだ？」

公秦「その時は俺が斬る」

李駿「一人ですか？」

公秦「いや雷虎隊を連れて行く」

李駿は少し黙つたが何とか認めてくれた。

李駿「……つたくしうがねえ行って来い」

公秦「後頼みたい事が2人にある」

李駿「なんだ?」

嘉威「なんでしょうか?」

公秦「1つ俺が留守の事は將軍以外話すな、2つ俺の留守の間嘉威俺に変装ししてくれ」

嘉威「はつ主が望むなら」

公秦「3つお前達は反董卓に付け、4つ雷虎隊は修行に出したと言つといてくれ」

李駿「・・・わかつた」

嘉威「仰せのままに」

公秦「俺は出発の準備をする、お前達は門を開けといてくれ」

2人『御意』

俺は一人と別れ馬屋に向かつたが・・・

突然玲封が飛び込んできた。

玲封「公秦様、私もお供させてください!」

公秦「・・・聞いていたのか?」

玲封「はい、最初からずっと聞いていました」

公秦「…………わかつた、但し命令は絶対だぞ」

玲封「わかっています！」

公秦「ならついて来い」

俺は玲封を連れ馬屋に向かった。

俺は前もって準備していた服に着替え馬に跨った。

公秦「門へ向かうぞ」

玲封「はっはい！」

門に到着すると雷虎隊全員がすでに集まっていた。

公秦「すまん、遅くなつて」

雷虎隊隊長「いえ、我々も今来たところなので」

公秦「そうか……ならよかつた、隊長、親衛隊隊長も同行する事になつたよろしく頼む」

雷虎隊隊長「わかりました」

公秦「後嘉威、玲封の事も適当に言つといてくれ」

嘉威「わかりました、お氣をつけて」

公秦「行つてくる、では行くぞ！」

雷虎隊『オー！』

100騎ばかりの馬が一斉に目的地洛陽に向けて駆け出した。

2週間後、洛陽

俺達は2週間の旅を終え無事洛陽にたどり着いたのだった。

俺達は？陵の商人の護衛隊といふことで街に入つてゐる
予想通り街は活氣で溢れており、噂は嘘であることを確認した。

玲封「ここまで違つと疑つていた私達が恥ずかしいです・・・」

公秦「まあ気にするな、氣づかなかつた奴よりはよっぽど悪いだろ

玲封「確かにそうですね」

俺達がそつ話していると・・・

警備兵「待つて！！」

強盗「ちっ・・・・しめた

強盗を警備兵が追いかけていた。

そして追い詰められた強盗はとある少女を人質に取つたのだった。

少女の連れらしき少女が叫んだ。

少女の連れの女性「月！」

その言葉を聞いて俺は吹きそうになつた

公秦「ブツ・・マジか・・・」

玲封「どうなれこましたか？」

公秦「いや何でもない」

（まさか董卓が人質に取られるとは・・・警戒心無さ過ぎだぞ・・・）

玲封「どうしますかあの男、警備兵は手を出させなさいですが・・・

」

公秦「俺が片付けてくる」

玲封「分りました」

俺は俺自身に電磁加速を『え男の所に向かつた

公秦「走力向上スピードアップ」

その後は一瞬だった。

俺は男の背後に回り首に手刀した。

男はそのまま意識を失いその場に倒れた。

それを見た警備兵はすぐさま強盗を縄で拘束した。

俺は尻餅をついた少女に手を差し伸べ安否をきいた。

公秦「大丈夫か？」

董卓「へう大丈夫です／＼／＼

それを見ていた玲封は仏頂面になっていたが俺は気づかなかつた。

周りからは拍手歓声が聞こえてきた。

町人「やるじやねえかあんちゃん

子供「お兄ちゃんかっこいい！」

婦人「うちの旦那もあんな風なつてほしいわ」

そう町人が話していると・・・連れであるう少女が駆けつけた。

董卓「あつ詠ちゃん」

賈駆「あつ詠ちゃんじゃないでしょーまつたくもう僕を心配させてー！」

董卓「へう”めんなさい」

賈駆「本当にありがとうございます、貴方のお名前は？」

公秦「俺の名は延涼、そして連れの法鮮」

賈駆「僕は賈駆」

董卓「私は董卓です」

俺達は2人の案内で宮殿に呼ばれたのだった。

真偽、眞実を知るために（後書き）

第16問 次回陸は董卓の將軍の一人と一緒に打ちしますさて誰でしょ？

1 恋

2 華雄

3 霞

さて誰でしょ？、ヒント、陸と面識があります。

一戦、公泰VS張遼（前書き）

16問目の答えは3番 霊でした。

走力向上はとある科学の超電磁砲6話で子供バッくを拾おうとした時の御坂さんが使った技と思つてください。

一 戦、公秦VS張遼

俺達はそのまま洛陽の宮殿に呼ばれた、偽名の理由はどこかに潜んでいるであろう間者に気がつかないようにするためだ。

しばらく大広間で待つていると庶民の格好からいかにもお偉いさんと思わせる服装で現れた。

董卓「先ほどは本当にありがとうございました」

賈駆「僕からも本当に用を助けてくれてありがとうございます」

延涼「当然の事をしましたですよ」

法鮮「延涼殿は困った人を見捨てれない性質の人ですからお気になさらず」

賈駆「それでも恩人です、僕達にお礼をさせてください」

延涼「お礼など要りません、その心遣いで満足です」

董卓「それでは氣がすみません、お願ひしますお礼をさせてください」

延涼「・・・それでは私達を雇つてくれませんか?」

2人「雇う?」

延涼「はい、私達は?陵の商人の護衛として雇われていました・・・

ですが当然商人殿がもう護衛は要らないから、去つてくれと言われていたのです、そう途方に暮れているときに貴女方に出会ったのです

「

董卓「そうですか・・・可愛そうにわかりました、私の下で働いてください」

2人「ありがとうございます」

俺達2人は董卓の客将として雇われる事になった。

そして董卓たちは俺達を將軍達に紹介するため全員呼んだのだった。
まあ、華雄、呂布、陳宮は初対面だから良いとして張遼には完璧に
バレるな・・・

「こりゃ素直に言つたほうが良いな。

そうしていると次々と將軍達が現れた不幸中の幸いなのか張遼が一
番遅くに来たのは良かつた。

張遼「あんたは・・・」

そう張遼が言いかけた時決心して自ら言つた

公秦「一つ謝らないといけないことがある

董卓＆賈駆「??」

公秦「俺の本当の名は公秦だ」

その言葉に場が固まつた。

董卓、賈駆は突然の事に動搖した。

張遼「なんであんたがある？」

公秦「丁度強盜に襲われてゐる董卓様に出くわしてなほつとけなかつたから助けたんだ」

張遼「違つて何でアンタが洛陽におるそやと聞こへるそやー」

張遼は顔を真つ赤にして迫つてきた。

張遼「もし暗殺とか言つなりその場で斬るでー」

公秦「何勘違ひしてこる？」

張遼「どうこう意味やー」

公秦「俺はただ尊が本当か由ら確かめに来ただけだ」

張遼「尊？」

公秦「知らないのか？董卓が圧政をしていると言つて尊を？」

その言葉で今まで無言だった將軍達も反論した。

華雄「なんだとー月が圧政だとふざけた事を言つたー」

呂布「……兎悪い事してない」

陳宮「そりですぞ、そんなことするばっかありますな」

(さすが董卓、信頼が厚いな……)

公秦「まあ、確かに噂は嘘だったが他の諸侯は動き出しているや」

張遼「ありえへん……」

一気に場が重くなつた。

賈駆「その話詳しく聞かせて」

公秦「ああ、いいだろ?主格は袁紹に間違いはない、続いて劉備軍、曹操軍、袁術軍(孫策軍)と動き出している」

賈駆「……最悪だ……」

公秦「後半月もすれば馬鹿猿が反董卓とか名乗つて攻め寄せてくると予想される」

そう言つてると横から華雄が話してきた。

華雄「ならお前はどうしたがだ?」

公秦「もちろん董卓軍につく」

その言葉で場はほつとした。

公秦「俺はもう一つ用事があつてきたんだ」「

賈駆「用事?」「

公秦「ああ、董卓軍と同盟を結ぶためにきた」

その言葉に全員が驚いた。

張遼「……」「めんな、ほんま」「めん」

張遼は謝ってきた。

公秦「気にするな、偽名を使つた俺も悪い」

張遼「せやけど……」

公秦「くどいと男に嫌われるぞ」

張遼「……」

張遼「わかつた／＼／＼

ふと玲封を見ると握りこぶしを作つていたまあ理由はわからんが。

その後非公開に同盟を結び改めて自己紹介をした。

公秦「俺の名は公秦、字は玄龍だよろしくお願いします」

玲封「私の名は玲封、字は海棠よりしくお願いします」

張遼「ついで名は張遼、字は文遠やよひじゅつな

華雄「私は華雄、字は無いがよろしく頼む」

呂布「……恋は……呂布……奉先」

陳宮「音々は陳宮、字は公台ですぞ」

賈駆「僕は賈駆、字は文和改めでよろしく

董卓「私は董卓、字は仲穎です」

ちなみに本名は將軍達のみ教えて兵達には密将延涼と名乗っている
同様玲封も法鮮と名乗っている。

しばりく董卓達と話していると張遼が声を掛けてきた。

張遼「なあ、公秦うちと勝負せいへん?」

公秦「……別にいいが勝負はわかってるだ

張遼「それでもしたいんや」

公秦「そつかなら行くか」

張遼「ほんまか?」

公秦「ああ」

張遼「じゃあ、行くで」

俺達は訓練場へ向かつた

張遼は着くと早々愛刀の飛龍偃月刀を構えた。

俺も習つて月光を構えた。

張遼「珍しい刀やな」

公秦「ああこれか?これは遙か東の國の物だ」

張遼「そつなんか、じゃそろ行くで」

公秦「ああ

その言葉を筆頭にさすが神速と言われる速さで斬りかかってきた。

公秦「さすが神速だな」

張遼「無駄口は叩かない方がいいで」

今のところ公秦は防御の一^ト点張りだった。

張遼「なんで攻撃せえへん?」

公秦「様子見だよ」

張遼「それなら決めさせてもらひで!」

張遼「蒼龍神速撃!」

確かに速度は速いが少し大振りになつたため隙が生れた。

その隙を俺は見逃さなかつた。

公秦「知らないのか、一番隙を見せやすいのが大技を出している時だと」

その言葉と同時に最初より1・5倍ほど速くなつた突きを軽々と避け張遼の首元に月光を突きつけた。

張遼「・・・ひの負けや」

張遼「ほんま強いな公秦は」

公秦「いや張遼こそ、雷神の將軍達と互角だつたぞ」

張遼「そつか・・・靈や」

公秦「ん？」

張遼「真名は靈や」

公秦「いいのか？」

張遼「くどいと女に嫌われるで」

公秦「それもそうだな・・・真名は陸だ」

張遼「よろしくうな陸」

公秦「ああよろしくな、霞」

華雄「そうか霞が教えるなら私も教えないとな、私の真名は秋沙あこさだ」

いつの間にか将軍達が集まっていた。

呂布「・・・恋・・・真名」

陳宮「ぬぬ・・・ねねは音々音ですぞ」

賈駆「僕は詠、陸よろしく」

董卓「私は用です、よろしくお願ひします陸さん」

玲封「これ私も言つた方がいいのかな・・・」

心の中で言つたつもりが・・・

陸「声に出てるやれ」

そつ声に出してしまつていたのだった。

玲封「――」

玲封「私は涙です」

いつして真名を預けた俺達は夜宴を開いたのだった。

— 戰、公秦 VS 張遼（後晉文）

どうも～～李駿です。

華雄の真名はわかつての通り姫神の名を使っています。

姫神ファンの皆さんどうかお許しあ

夜宴、董卓ヒカルの仲間達（前書き）

いつも、お久しぶりです、正直スランプ中でした、何とか終わつた
ので出します。今後も不定期ですが搭載したいと思つので応援よろ
しくお願ひします。（ - - ）

夜宴、董卓との仲間達

董卓と非公開同盟を結んだ夜、俺達は董卓達の宴に招待された。

俺たちが来るとまだ月と詠は来ていなかった。

霞「なんや遅かつたな陸」

陸「すまん」いつも事情あつてな

霞「まあええでまよ座りな」

俺は霞の横に座つた。俺が来た後直ぐに恋が来て俺のもづ方の横に座つた。

恋「・・・恋も横座る」

そつ言い終えた瞬間背後から殺氣を感じたよつた気がした。

恋は俺の右隣に座り肉まんを食べ始めた。

恋「もあゅもあゅ・・・」

・・・やべえマジで可愛い・・・俺はついつい恋に見惚れてしまった、
背後の殺氣を感じながらも・・・そして

音々「ぬぬぬ、恋殿に触るなー、ちんきゅーせつくー」

もぢりん俺は気づいていなかつた、そして気づいたときももう顔の

前まで蹴りが来ていた。

当たったと思ったが衝撃はなかつた。ふと見てみると恋が見事に音々をキヤッチしていた。

恋「・・・けんきゅー邪魔しちゃ駄目」

恋は軽く音々を睨んだ。

音々「ですが恋殿、『邪魔しちゃ駄目』・・・わかりましたべ」

口では喋る事はなかつたが顔はおもいつきし俺を睨んでいた。

1時間歩度経つと月と詠が仕事を終えやつてきた。

月「おつ遅くなつてすいません」

月は店主であるの元ペコッと一礼して入つてきた。

詠は何も言わずに入つてきた。

陸「月、一々礼なんつてしなくていいぞ、俺達は月の配下だからな」
俺が言つと月は謝つてきた。

月「くうすこません」

俺はこのままではじちが明かないと思い、俺はその場を立つて月の頭を撫でた。

月「へう何をするんですか?」

そつ言ひ返され俺は少々考えた

陸「謝る用が可愛かつたからひにな」

それを聞いて月は顔を少し赤くした。

その後視線が熱い事に感じた特に俺が居たところから・・・

恥ずかしくなった俺はすぐに席に座り飲みまくつた、もうぐるんべろんに。

俺が寝た後最初に近づいたのは霞だった。

霞「陸～もう寝たんか?」

返事が無いことを確認した霞は考え、一つ閃いた。

閃いた事とは・・・

霞「つちも眠たくなつたからお先に失礼するわ、あつおまけに陸を部屋に運んどくわ」

やつてその場を出て行った。

董卓勢「「「「「...」「」「」」

董卓勢はその言葉に驚いた。普段は驚かない恋さえも驚いていた。訳は・・・霞が田の前に酒があるのにそれを飲まず寝ると言つたか

らだ。長年付き合っていた秋沙は霞がしようとすると事を悟つたらしく、恋と涙を連れてそそくさと出て行つた。

陸の部屋に向かう廊下の中秋沙は独り言を呟つた。

秋沙「霞、陸の独占は例え友であつても許さん！」

その言葉は恋、涙に聞こえようやく霞がしようとしている事を理解した。

ちなみに音々は秋沙に強力な酒を無理やり飲まされ寝ていた。

延涼の部屋、

華雄達が丁度部屋の扉を空けたとき、霞は陸の上に乗つて陸の口を自分の口で塞いでいた。

それを見た秋沙は怒鳴りつとしが霞に止められた。

霞「しいー、陸が起きたらあかんやろ」

その言葉に何とか怒鳴ることを抑えた。

霞は仕方が無いと黙つた。

霞「しゃあない、皆で楽しもつや」

その場にいた全員が同意したのだった。

もちろん俺はそんなこと知ることも無く寝ていたのだった。

夜宴、董卓との仲間達（後書き）

これからも頑張ります^_^

翌朝、後悔しても後の祭り（前書き）

正直、超短いです。次回はもう少し書くよければします。

翌朝、後悔しても後の祭り

翌朝、俺はなぜか腰を痛めながら起きた。

陸「・・・不幸だ」

とある小説(ライノベ)の主人公のような口調をしてしまった理由は

霞「スヤスヤ」

恋「ニ～ニ～」

秋沙「ニ～ニ～ニ～ニ～」

涙「ニ～ニ～」

この4人のことである。

陸「なぜ裸で俺の横で寝てるんだ・・・」

そうただ寝てるだけならいいが裸で寝ているのだ、しかも俺は夜の記憶はない。

酔っ払った状態でもしや俺は・・・今更後悔しても後の祭りだった。

1時間程度経つとまず霞が起きてきた。

霞「おはよう、陸」

陸「ああ、おはよつ」

最初は普通の挨拶だが次の言葉は爆弾発言だった。

露「もし子が出来たら名前どうないしようか?」

・・・言いやがった、まだ3人寝ているのに一発目から弾道ミサイルを落としやがった。

続いて涙が起きた。

涙「おはよう御座います陸様」

陸「ああ、おはよつ」

これまた次の言葉は爆弾発言だった。

涙「・・・側室でいいのによろしくお願ひします／＼／＼

今度は水素爆弾を落としやがった・・・まだ2人あるのか・・・おれの心はもう焼け野原だ・・・。

次に秋沙が起きてきた。

秋沙「おはよつ、陸」

陸「おはよつ、秋沙」

まあまあパターン的に最初はわかつていた次だ次果たして俺は耐えられるか・・・

秋沙「まさか私が大人になるとはな・・・」

思つたよつきつはなかつたが大空襲クラスだな・・・

そして最後に恋が起きた。

恋「・・・おはよう陸」

陸「恋おはよ~」

どんど~い俺は乗り越えるぞ・・・

恋「・・・これで恋は陸のお嫁さん」

・・・・ああ、終わつたぞ、最後は核を落としやがった・・。

すかさず俺は土下座した

陸「すまん、俺は大変な事を・・・」

霞「大変な事?なにいつてんねん?」

涙「主お顔を上げてください、主は悪い事していません」

秋沙「そうだぞ、2人の言つとおりだ」

恋「・・・」

・・・無理だこんな状況記憶に御座いませんじやすまねえ・・

陸（汪牙にばれたら俺どつなるかな・・・、「れじやあ一刀と一緒に
じゃねえか、はあ～）

陸「こ・・・これからもよろしくな」

4人は嬉しそうに頷いた。3人に聞かれてるのも知れずには

音々「ぬぬ～・・・恋殿～」

月「へう・・・見てはいけないものを見てしました・・・」

詠「まさか一晩で4人つて・・・」

俺達はそんなことも知らずに話していたのであった。

幕開、集結反董卓連合

あれから4ヶ月が経つた、華雄は特訓で猪癩を最小限に抑えることに成功した。

そしてとうとうその日が来た。

伝令「反董卓軍が集結しつつあります」

賈駆「わかつた、下がつていいよ」

伝令「はつ

賈駆（陸が予想したより少し速く動いたわね・・・）

急遽俺達は王座に呼ばれた。

詠「皆に聞いてもらいたい」とある

將軍達「・・・」

詠「反董卓軍が動き出した、次々と諸侯達が集い始めている

陸「予想より早いな・・・」

詠「私達は？水関と虎牢関で防御、相手の兵糧が無くなるまで耐え
るやうすれば勝てる」

陸「ああ、確かにそれで構わないだろ、ただそれじゃあ円満が名を
きせられたままだぞ」

詠「じやあ僕達はどうすればいい?/?」

陸「簡単だ、反董卓連合を潰す」

その場にいた全員『...』

詠「それじゃあもつと円の評判が悪くなるじゃないか!」

陸「勝ったなら奴らに条件として洛陽の尊は袁紹の企みによる嘘と
漢中に流せと条件を出せばいい、事実本当だからな」

詠「数ではあちらの方が上、兵の差でも勝てるかどうか不安な状態
でどう勝てばいい?」

陸「忘れちゃ困るが俺は軍を率いているんだ、それを併せれば充分
勝つ事が出来る」

詠「じゃあその軍は今何処にいるんだ?」

陸「反董卓連合の中や」

全員『...』

霞「今陸なつて言つた?」

一気にその場は重くなつた。

明らかに殺意を向けて話してきた。

陸「心配するな、裏切るのは反董卓連合だ、月達を裏切るなんて絶対にしない」

霞「ほんまか?」

陸「ああ神に誓つて」

・・・

霞「・・・陸は嘘つけへんからな信じたる」

秋沙「私も陸を信じおつ」

恋「・・・陸嘘ついてない恋は信じる」

音々「・・・恋殿が信じるなら信じますぞ!」

詠「・・・」

將軍達は信じてくれたが、さすがに詠はまだ信じられないようだった。

月「私は信じます」

その言葉で決心したのか詠も信じてくれた・・・さすが月だ。

詠「月が信じるなら・・・僕も信じるよ」

陸「信じてくれてありがとう」

俺は嬉しく笑顔で答えた。

月「へうそっそんなことないです」

秋沙「仲間を信じるのは当然だ」

・・・俺を仲間だと思つてくれていたのか正直嬉しい

霞「当たり前やろ、陸はうちの旦那さんやから／＼／＼

・・・やめてくれ、こんな一大事の時にその言葉は・・・つてもう遅いか、俺に視線が釘づけになつてやがる。

涙「霞！陸様は私の物です！」

・・・やつぱりか、予想はしていたが・・・

秋沙「それは違うぞ涙！陸は我々の共有物だろ」

・・・は？俺はいつから物に成り下がったんだ・・・

涙「・・・そうでしたすいません秋沙将軍」

すんなり謝る涙・・・実はとつと華雄は猪癩を解消した後才能が開花し今では涙よりも強くなっているので歯向かう事が出来なかつたと言うだけだが。

次の瞬間涙を含めた3人に詠が制裁した。

ゴッソリ

詠「あんた達今の状況わかっているわけ?」

3人『・・・』

その後3人は1時間みつちり鬼人モードになつた詠に説教されたのは言うまでもなかつた。

一方反董卓連合では・・・

反董卓軍陣営

袁紹「遅いですわね・・・」

劉備「公秦様まだかな~」

曹操「なぜアйツの軍はいつも遅いのかしら?」

孫策「まあまあいつもの事でしょ」

曹操「・・・それもそうね気軽に待つわ

ちなみに約束の時間より1時間遅い。

その30分後伝令が現れた

伝令「?陵の雷神が到着しました」

曹操「分つたわ、下がりなさい」

伝令「はつ失礼します」

その場にいた全員がやつと来たかという表情をした。

そしてやつとあの男が天幕に入ってきたのだった。

公秦「いや～すまんすまん、途中賊に出くわして遅れてしまった」

・・・

曹操「・・・それなら仕方がないわね」

劉備「大丈夫ですか？」

公秦「心配してくれてありがとな、大丈夫だ問題ない」

孫策「ふうこれでやつと全員そろったわね」

ちなみに今回はただの集合だけであるまた後日作戦会議が開かれるのだ。

そのためもう天幕を出ようとした時、孫策に捕まってしまった

公秦「それじゃあ俺も失礼する」

そつ言い天幕を出ようとした時、孫策に捕まってしまった

孫策「陸久しづりね、まさか貴方が太守になるなんて思っても見

なかつたわ

公秦「孫策、久しぶりだな、すまんが俺は用事があるんだまた後で
な」

そう言い公秦は天幕を去つていた

孫策「ちょっと待つて！」

そう声を出して天幕を出たが公秦の姿はなかつた。

（・・・おかしいわ、なぜ私を真名で呼ばなかつたの？）

そう疑問を残した孫策だった。

幕開、集結反董卓連合（後書き）

不定期ですが更新はしていくつもりですよろしくお願ひします^_^

前線、?水闘の戦い（前書き）

いつもお久しぶりですへへ楽しんでくださいへへ

前線、？水関の戦い

俺は今？水関にいる、ちなみに？水関とは洛陽を守るための門（皆）である。それ以外にも後方に虎牢関といつ難攻不落の関がある。

？水関に配置されている将は延涼（公泰）、華雄、張遼である、華雄の猪癩は地獄の猛特訓で何とか抑えることが出来たので心配はないと思うがな・・・

虎牢関には呂布、陳宮、法鮮（玲封）が配置されている。

まあ俺的には？水関のみで反董卓の連中を潰す予定だが一応虎牢関にも配置されている。

張遼「延涼、そろそろやで」

延涼「ああ、分った」

俺は自室から門の上へと向かつた。

雷虎隊隊長「延涼様全員配置につきました」

延涼「分つたその場で待機しろ」

雷虎隊隊長「はっ」

俺は奴らが来るのを今か今かと待っていた。

一方反董卓連合はこうと・・・

袁紹が適当に配置を決めていた。

袁紹「それでは発表しますわ、まず前衛に劉備さん、右翼は公秦さん、左翼は曹操さん、中堅が私、右翼後方が劉表さん、左翼後方が孫策さん、後の方は後方で援護もしくは待機ですわ」

・・・

その場が沈黙したなぜかと言つと・・・一番兵数の少ない劉備軍が前衛を任せられたからだ。

さすがの劉備もこれに反論した

劉備「私達の数では董卓軍に敵いません

袁紹「・・・仕方がありませんわね」

その言葉に劉備は安心したが次の言葉に呆気に取られた。

袁紹「私の軍を貸してあげますわ、それなら文句はないでしょ?」

劉備「・・・わかりました」

結局劉備は前衛を任せられることになった。

劉備軍陣営

劉備軍は他の軍より少し遅れていた理由は劉備が決心できていなかつたからだ。

劉備「……」

そこへ劉備の信頼できる仲間達が声を掛けってきた。

諸葛亮「大丈夫です、華雄は猪武将として有名です、何とか誘い出せば適わないことはありません」

関羽「義姉上、私が見事華雄の首を取つて見せましょう

張飛「大丈夫なのだ、鈴々にかかれば董卓軍なんてちょちょいのぶーなのだ！」

趙雲「主、我々を甘く見てはこまりますな、必ずや敵将を討ち取りましょうわ」

劉備「・・・皆ありがとづ、うん私頑張るよ」

劉備は自信を取り戻し前へ進もうと決心したのだった。

劉備「そろそろ私達も行かないと」

関羽「聞いたか？皆の者出撃だ！」

兵達『オー！』

劉備軍は？水関に向け出撃したのだった。

場所が変わつて、？水関

延涼「やつと来たか、待ちわびたぜ、やはり前衛は劉備軍か？」

まあ予想はしていた、史実では確か関羽が華雄に罵倒を浴びせ門から誘い出したんだよなでも俺がいるから大丈夫だろう・・・そうだいい事思いついた。俺はニヤニヤしながら戦場を見上げていた。

霞「どうしたん?ニヤニヤして?」

霞は不思議そうに声を掛けってきた。

延涼「いやこれから起る」とを考えると楽しくてな

霞「? ?」

霞は理解ができずそのまま立ち去った。

その少し後俺は雷虎隊隊長を呼んだ。

延涼「隊長、隠密がうまい奴一人呼んできてくれ

雷虎隊隊長「はっ」

数分後・・・

雷虎隊隊長「連れてきました」

延涼「そうか、『苦勞』

隊員「なんでしょう?」

延涼「これを李駿に渡してくれ

俺はそういう手紙を渡した。

隊員「はつ畏まつました」

隊員はそつ言い姿を消した。

延涼「隠密隊を少し入れたのが古と出たな」

雷虎隊隊長「そうですね」

俺達はそつ言い戦場を見上げた。

蜀陣では・・・

諸葛亮「畠さんお話があります」

関羽「どうした、朱里？」

武将達は作戦室に呼ばれていた。

朱里「ここに呼んだのは私が考えた策を畠さんに聞いてほしいからです」

趙雲「策とはなにですかな？」

朱里「えーと、まず愛紗さんと星さんが華雄を挑発します、その後怒り狂つて出てきた華雄部隊を鈴々ちゃん達の部隊とお2人の部隊で殲滅します、但し華雄は愛紗さんと一緒に打ちしてもいいしゅ・す」

最後の最後で諸葛亮は囁んでしまい少し顔が赤くなつた。

愛紗「なぜ、華雄の相手は私なんだ？」

朱里「私達の名声をより良く上げるためです」

愛紗「承知した」

その頃雷神陣嘗・・・

李駿「なに奴！」

李駿は気配を感じ斧を構えた。

雷虎隊隊員「李駿様、公秦様から文です」

李駿は文を受け取り目に通した。

李駿「・・・承知した」

内容を理解し隊員に返事した。

その後隊員は姿を消していった。

李駿「さすが嘉威仕込みの隠密隊だ」

そつ言い天幕から出て行つた、各將軍に知らせるために。

数分後、隊員は？水闘に戻つてきていた。

雷虎隊隊員「李駿様に文をお届けしました」

延涼「わかつた、直ぐ配置につけ、今回は陣じやないからな」

雷虎隊隊員「はつ」

数分後、劉備軍の中から2人の女が？水闘に向かつてきた。

やはり関羽か・・・もう1人は趙雲だな。

その2人は予想していた通り華雄を罵倒した。

関羽「聞けえ、我が名は関羽、劉備元徳の将なり、華雄」とき私1人で成敗してくれるわ！」

「

関羽「主も武将なら正々堂々私と勝負しろ！」

・・・横の華雄は口を押さえて笑っていた。

華雄「馬鹿か貴様は、籠城している我々が関は捨てて出て来いと？なぜ自ら盾を捨てねばならん？」

ちなみに今は準備運動みたいなものである。

そして今まさに華雄罵倒戦が始まろうとしていた。

関羽「・・・拍子抜けだな、勇敢な將軍と聞いて主から願い出できたものの、こんな臆病者だったとは、恥を知れ、恥を！」

華雄「貴様、今なんと言つた！」

関羽「腑抜け將軍と言つたんだ、どうせ武もたいした事がないだろ
う」

華雄「貴様、私の武を愚弄するつもりか！」

・・・笑つてやがる、わざと怒つているフリをしているな華雄は
関羽「これまで言つてまだ出でこないのか、貴様は亀か？ 今からそ
の？ 水関から出してやる」

そう言い関羽は隣にいる趙雲に合図を送つた、そしてその合図を聞
いた趙雲が華雄の牙門きに向けて矢を放つた、その矢は見事旗を貫
いた。

華雄「きつ貴様、よくも！ 今から貴様の首の取つてくれるわ！」

関羽「早く降りて來い、貴様など私の刀の鋒にしてくれるわ！」

関羽達はこれで怒り狂つた華雄が出てくると思つたが実際違かつた。

華雄「その前にお前達に私からの贈り物をくれてやる」

2人「？？」

そつ言い華雄は背後に配置していた兵に命令した、その兵は火矢を作りそのまま先ほど愚弄していた2人の牙門旗に向けて矢を放つたのだった。

その矢は見事旗に直撃し旗は燃え塵となつた。

それを見た2人は呆気に取られていた。

華雄「・・クククははは、まさか本当に出てくると思っていたのか
？私はそんなに軽い女ではない、ははは」

・・・一気に形勢は逆転した、趙雲は冷静を保てたものの、関羽は怒っていた

関羽「・・よくも・・よくも私をコケにしてくれたな、出て来い華雄、もう作戦などどうでもいい、貴様を叩き斬つてやる！」

趙雲「やめひ、愛紗、これでは敵の思つ壺だ」

趙雲は関羽を押さえつけたがそれを関羽が振りほどいた。

華雄「そんなんに私と戦いたいなら戦つてやつてもいいぞ、少し待て」

そして華雄は俺に振り向いた。

延涼「上出来だ」

華雄「陸／＼／＼

そう全て公泰の策略だったのだ。

延涼「じゃあそろそろ延涼といつ衣を脱ぐか」

公秦「それじゃあ行つてくれる」

華雄「陸がんばつて」

張遼「期待してゐるで旦那様」

公秦「おいおい、それはやめろ」

そつ言い俺は天に向かつて超電磁砲を放つた。

意味？それはこれからのお楽しみだ。

そうして俺は？水関から飛び降りた。

・・・それも見た2人はただ呆然としていた。

公秦「よう、久しぶりだな、関羽」 休息を参考

・・・返事はなかつた、少し経つと2人は我に返りこう言つた

2人「なぜ、貴様がいる？」

公秦「めんどくさいから後だ」

俺は大声で言つた

公秦「聞けえ！雷神の勇士達よ董卓の噂は偽りであった、これより
我が軍は董卓につく武器を持てえ！敵は反董卓に在り！」

雷神軍では・・・

李駿「聞いたか?」これより我々は後方の劉表、袁紹討つ、全軍反転、敵を殲滅せよ!」

雷神兵「「「オオー」」」

雷神軍は反転し劉表、袁紹軍を殲滅しにいったのだった。

少し時間を遡り孫策軍では・・・

孫策「今の見た冥琳? れーるがんよね?」

周瑜「・・・はい」

孫策「撤退よ」

周瑜「ですが・・・

孫策「今のうちに撤退しておかないと取り返しのつかないことになるわ」

周瑜「・・・わかりました」

周瑜「全軍撤退!」

兵長「でっですが

周瑜「命令だ」

兵長「はつ」

孫策軍は撤退して行つたのだった。

そうあの超電磁砲は仲間と知人（孫策）に知らせるための物であった。

元に戻つて？水関前

公秦「華雄の代わりに俺が相手になつてやるよ」

関羽「なぜ貴様が出てくる私が呼んだのは華雄だ！」

公秦「そりや自分の女貶されたら我慢できないだろ普通？」

関羽「……女だと……貴様許さん！……」

突如激怒した関羽が突進してきた。

公秦「おっとそれじゃあ昔の華雄……いや太史慈以上だな」

そう言いながら左右によけ続ける

公秦「お前の方が猪将軍に相応しいな」

関羽「死ね！死ね！死ねえ！！！」

怒りに身を任せて獲物を振つてゐるため、隙がありすぎる、俺は軽々斬撃を避けていく、もし相手が俺ではなかつたらとうに首を刎ねられているであろう。

公秦「ここまで見ていて哀れんでくる、今の貴様なら俺の兵でも軽く倒せるぞ……」

関羽「うるさい裏切り者の逆賊め！さつやとその首をよこせ！」

・・・ブチッ、

何かが切れる音がした、しかも俺の頭付近で。

公秦「・・・ふざけんじゃねえ！月はみんなの幸せを祈つてこれまで頑張つて来たんだなのにてめえらのせいに水の泡だ、大方貴様らは月が無害だと知つていたんだろう？それなのに襲つてきたどう考へてもてめえらの方が賊じやねえか！」

関羽「世のためだ、董卓には犠牲になつてもううしかない！」

公秦「・・・わかった、一撃で決めてやるよ！」

関羽「やれるものならやつてみろ！」

俺は双刀を鞘に納め、日本刀を納めたまま柄を持ち居合いの構えをした。

公秦「居合い、雷鳳！」

シユツ ズバアーン

関羽「ぐはっ！」

俺の一撃で関羽は倒れた。

公秦「劉備の將、關羽、この公秦が討ち取つたり！…！」

まあ殺してはないが…・・・

これにより劉備軍を始め残っていた諸侯も撤退を始めた。

そう、初戦の戦は董卓連合の勝利に終わったのだった。

前線、？水闘の戦い（後書き）

正直袁紹覇アーメ以上の馬鹿キャラでいきたいと思います。
これからも応援よろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7554p/>

真・恋姫†無双～雷の貴公子～

2011年11月23日13時52分発行